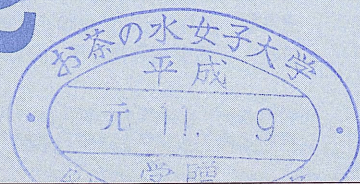


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1989 12

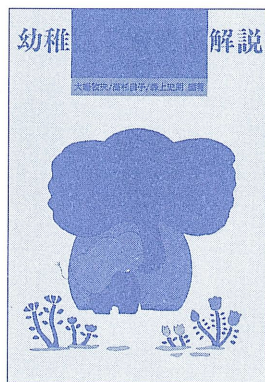


幼稚園教育要領解説

教育要領改訂の理由？「総合的」とは？「領域」とは？ などなど、教育要領の各項目について、明快な説明と、考え方の基本がのべられています。また、著者以外の協力委員による補足の話し合いもつけられて、よりわかりやすい内容となっています。

目次から

- 第1章 幼稚園教育要領はなぜ変わるのか
- 第2章 どんなふうになるのか—考え方の基本—
- 第3章 幼稚園教育の内容
- 第4章 これからの幼稚園教育を計画し実践するために
付録 「幼稚園教育要領」全文



岩崎婉子・大場牧夫・黒川建一・小林美実 A5判・270頁・定価1,200円(本体1,160円)
近藤充夫・高杉自子・森上史朗 著

<付>学校教育法施行規則(抄)

幼稚園教育要領

文部省告示「幼稚園教育要領」改訂版で、幼稚園教育の基本的な精神が示されたもの。実施日は平成2年4月より

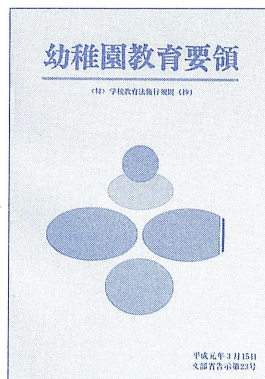
幼稚園から高校まで同時改訂公表され、教育のはじめは幼稚園からと幼稚園教育が位置づけられた。

改訂版は遊びを通して人や自然と関わる力を培い子どもの発達に即した教育の必要が示された。

人間として生きるための幼児期の教育内容が明らかになり、教育哲学が確立されたこと。

保育関係者必携の書である。

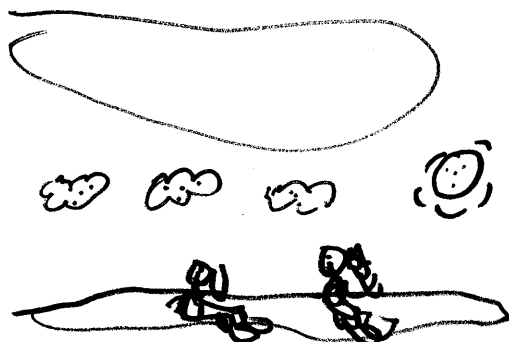
A 5 判・16頁・定価100円(本体97円)



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼見の教育



第88卷 第12号

幼児の教育 目次

— 第八十八卷 第十二号 —

© 1989
日本幼稚園協会

時の流れの中で(2)

— 逆転する変化を見て —

津守 真……(4)

子どもとクリスマス……

黒田 成子……(10)

倉橋惣三の保育目標論

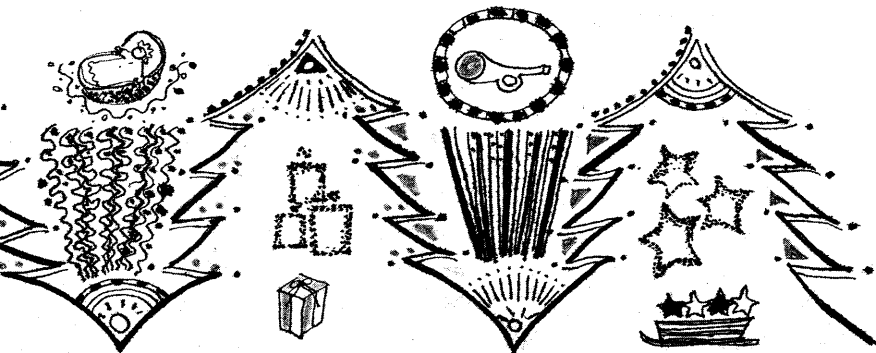
— 心理学から保育学へ —

児玉 衣子……(16)

海外クリスマス便り

フランスのクリスマス……

雨宮 裕子……(24)



アトランタのクリスマス……………入江 礼子…(31)
西ドイツのクリスマス……………美谷島いく子…(35)

子どもにとって楽しい音楽リズムのあり方を考える(5)……………原口 純子…(44)

臨床の現場から

私の出会った人々(五)……………安島 智子…(52)

第八十八巻総目録……………(61)

表紙イラスト・津守 たたえ

扉題字・堀合 文子

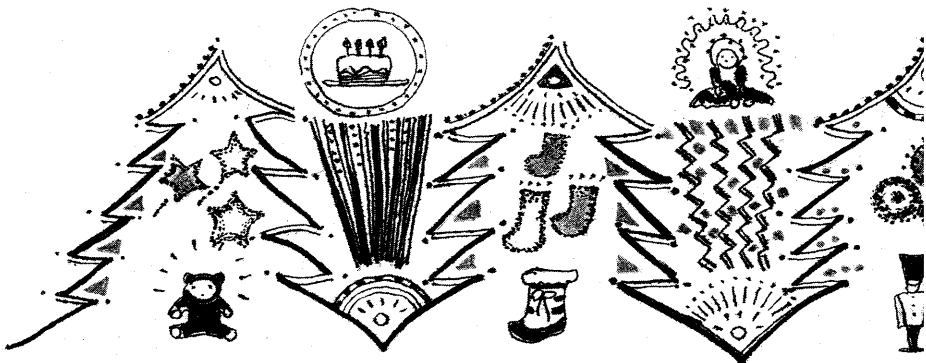
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／村山 英子

上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



時の流れの中で(2)

—— 逆転する変化を見て ——

津守 真



今年の夏、ロンドンで私は精薄者の施設を訪問したいと思い、ロンドン大学のC先生に紹介を願った。そのときに直ちにもどってきた返答は、この国では現在には施設 (residential institution) という語は使いませんということだった。これは私の最初のショックだった。それでは何とこのかというかと、グループホームとか、ホステルがこれに代わるということであった。次のショックは、従来からの精薄施設は英国では一九九一年に閉鎖されることを知ったときである。閉鎖して後どうするのか、長年そこで過ごしてきた人や職員たちはどうするのか、だれにでも直ちに思い浮かぶ疑問をたずねつつ、私は紹介されたいくつかの場所を訪問した。

最初に訪問したのは、ウォルフソン・センターという、ロンドン大学医学部付属の障害

児診断センターだった。内容的には特にかわったこともないが、医学部付属なので、小児科の医者になる人々がここで障害をもつ子どもたちに実際にふれ、心理教育の分野の実習をする機会があるということの教育的意義は大きいと思った。ここで案内をして下さったストックリー夫人にたずねたところ、英国では一九八一年に障害をもつ子どもたちを普通学級に入れる法律が通過し、特殊学級や養護学校が次々に閉鎖されたが、最近はまだもとに戻りつつあるという。普通学級ではこの子どもたちを丁寧にみるのが困難だということが分かってきたというのが主たる理由のようである。また、サッチャーの教育改革により、7歳、11歳、14歳、16歳の年齢で標準学力テストが今年から実施されることになったことも理由として見逃せないようである。

後日、ロンドンの郊外にあるウォルティングヴェースクールという養護学校を訪ねたが、広い庭と校舎があって、幼児のクラスから高校生のクラスまで六〇人の子どもたちもいるその学校では、毎年希望者が増加しているという。理由としては前と同じことが語られた。更に、精薄施設が閉鎖される現状で、養護学校の需要が多くなっていることも指摘された。

私は、是非、閉鎖されつつある施設を訪問したいと思っていたところ、ある晩、C先生から電話を頂き、セント・アルバンス・ホスピタルを紹介された。ホスピタルと呼ばれてもそれは全く従来からの精薄施設にほかならない。20歳から70歳以上の年齢の人々が六〇

○入所しており、約五〇〇人の職員が仕事をしている。目下、入所者をグループホームとホステルに移しているところで、あと数年で全員をコミュニティに移管するという。主任心理学者のデイヴィス先生が、二日間私につききって案内して下さり、私の疑問に丁寧に答えて下さった。

施設閉鎖の動機は二つある。第一は、ノーマリゼーションの考え方である。十五年程前から提唱され、研究されてきたこの運動は、障害をもつ人々も、普通の市民と同じく、コミュニティのあたりまえの生活をするように、人生の幸福があるという考えである。これだけ聞けばごくあたりまえの考えのように思えるが、この五十年間、全く逆の方向で福祉は進んできた。コミュニティから隔離された場所で、一生涯生活を保証されて過ごすのが、子どもにも家族にも幸せであるという考えであった。その考えはいまや変化して、これまで何十年間も施設で過ごしてきた人たちを、コミュニティの中に移すという仕事を、心理学者、ソーシャルワーカー、指導員、教師たちがチームを組んで実行しつつある。デイヴィス先生は、その仕事の指導者である。

第二の理由は財政である。大きな施設を維持する必要がなくなり、施設の広大な敷地の売却費が収益となる。だからサッチャーは福祉の費用の節減のためにこの案を推進しているのだという人もあった。グループホームは三、四人の障害者を普通の家庭であずかる制度で、その家庭には補助金が出る。ホステルは二〇人程度の障害者のアパートで、障害者の専門の指導者が管理人となる。ただし、その管理は最小必要の限度にとどめ、障害者の

出入も行動も自由である。

果してこの方式が費用の節減になるかどうかについては疑問視する人が多かった。大きな施設は、一度閉鎖すればもとにもどすことはできない。そのことを考えると、これは大冒険なのだ何人もの人が語った。障害の人々に普通の生活をという人間的な考えのために、敢えてこの冒険がなされつつあるのを、私は眼の前に見たのだった。

セント・アルバンス・ホスピタルの敷地には、立派な煉瓦造りの建物がいくつも建っていた。門のわきにある建物はソーシャルスキル（社会能力）訓練とよばれていた。何十年もこの中で生活していた人たちが町の中に住むために、ある期間をここで教育を受けるのだという。学習理論による抽象的な訓練をするのではなく、実際にレストランやパブで食事をし、店で買物をし、郵便局にいくというような生活経験を積むことがここでなされていた。

グループホームやホテルで生活をはじめた人たちが、週一回ここにもどってきて、デイヴィス先生のチームの人たちとグループで話し合う。私はその会合に出させてもらったが、人によってはバスの中でトラブルを起こして、いまはこのホスピタルの職員が送り迎えをしていた。五十歳になるある人は、公園で子どもと遊んでいてトラブルを起こして警察の世話になっていた。こんなトラブルがありながらも、この人たちを普通のコミュニケーションの生活をさせるという冒険がなされつつあった。一度ここを出ていった人たちはだれ

もう一度ここにもどりたいと思わないとデイヴィス先生は言われた。自分の家に住んで、いつでも店に買物に行けて、好きなときに家に帰ってねられるという個人の自由のある生活が、だれにでも人間にとって幸福のもとにあることがわかる。

施設を閉鎖するということは、障害をもつ子どもたちや大人たちを、障害者という特別な人として扱うのではなく、この人たちが一緒に生活する社会を実現するという、障害福祉社に対する考えの根本的变化を意味している。

この人々は、問題行動 (Problem Behavior) という語をチャレンジング・ビヘイヴィア (Challenging Behavior) という語に代えることを提唱する。いわゆる困る行動というのは、子どもに固有のものではなくて、むしろそれは大人が自分の固い考え方を変えるようにチャレンジされているのだという。大人の見方がかわれば、同じ行動が問題ではなくなる。更に進んで、個人がチャレンジされるのではなく、社会がチャレンジされているという考えがここにはある。ソーシャルサービスが用意されれば、どんな行動も問題性は減じる。人手が用意され、タクシーや車椅子のサービスなどがなされれば、コミュニティはいろいろの人が住める場所になる。

四十年前には、障害をもつ子どもたちが大人になった施設で生活することはあたりまえと考えられ、そのときに困らないように小さいときから訓練することが必要なのだと考えられた。それから四十年を経た現在、こうして施設で生活している人たちを、普通のコ

コミュニティの生活にもどす作業をしている。

この夏、ロンドンで実際にこうした体験をし、私は福祉の分野が革命的变化をしつつある時代であることを感じた。

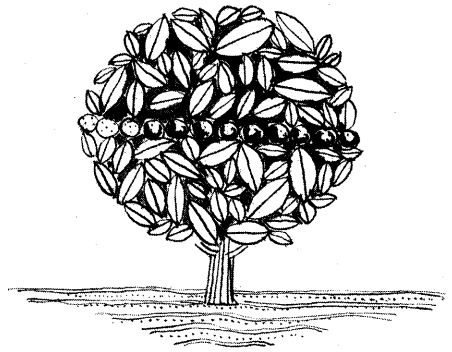
同じ方向の変化は、教育の分野にも起こりつつある。学校、幼稚園、保育所の建物の壁の中で、個人の能力を伸ばすのに役立つカリキュラムを実施することが教育の最大関心事ではなくなりつつある。インターカルチュラルイズム（異文化間教育）に見るように、移民や異文化の人々の異質性を尊重し、多様性を含めることによって新たな文化が創造されるという考え方は、ヨーロッパの教育の大きな流れになってきている。こう考えると、障害をもつ子ども、その多様さのひとつにはかならないだろう。

四十年前に当然と考えられていたことが、時の流れの中で、全く逆転するような変化の中で私共は仕事をしている。日本ではまだゆるやかな変化であるが、障害の子どもや大人を含めたあたりまえの幸せな人間生活を、どのように現代の現実の中に実現させるかが私共の当面しているいまの課題である。

（愛育養護学校）

子どもとクリスマス

黒田 成子



クリスマスといえは大人にとってはプレゼントやお歳暮売り出しの宣伝等が目につく季節である。子どもにとってはお父さんがクリスマス・ケーキを買って帰る日、サンタ・クロースからプレゼントを貰える時として待たれる日である。

もともとクリスマスはイエス・キリストがこの世に誕生された事を祝う日であるが、その喜ばしい出来事はあまり一般には受け入れられていないよう

だ。むしろ年の終わりの楽しいイベントとして定着している現状である。であるから教会幼稚園の園長がお寺関係の人から「お宅でもクリスマスをなさるんですか？」と言われたことがあったそうだが不思議なことでもない。

筆者のM幼稚園は教会付属ではないがキリスト教主義で百名足らずの学校法人の園である。保育方針は遊びを中心としている。一日の流れとしてはどん

な行事を前にしても登園時から十時四十分までは自由遊びの時間である。毎日いつもと変わらず、たとえばセイント・セイヤゴっこから高おにをしたり、箱製作をしたり、ままごと遊びなどをつづけている。クリスマスについての話し合いなどはそのあとの時間帯の事となる。

待つクリスマス

クリスマスは十二月二十五日の一日だけではなく、四週間前から始まる。クランツとよぶ常緑樹のリースをつるして一週間毎にろうそくを一本ずつ灯ともしてイエス降誕の時を待つ。四本のろうそくに全部火が灯されると、クリスマスがやってくる。「あ、クリスマスがくるんでしょう」「四本火がついたらクリスマスだよね」と言いながら子どもたちは去年の楽しかったクリスマスを思い出しているようだ。子どもたちは暗やみの中に赤々とかがやくろうそくの光りをふしぎそうに見つめる。それから「アドベ

ント・クランツにあかりが、つ、い、て」と軽やかにリズムのクリスマス・キャロルをみんなで歌う。クリスマスのことを知らない年少組の子どもたちも、何となくうきうきして喜びの輪がひろがる。

クリスマスは二期の終わりに当たるので一般には学芸会や子ども会が行われる園が多い。保育者達にとってはプレゼントの作製や劇の段どり、装飾のこと等雑多なことがあり、当日の準備に前日や前々日は夜までかかったりする。しかし、クリスマスの迎え方は当日パッと打ち上げる花火のようなものではなく、何週間も前から子どもたちと共に生活の中で毎日少しずつ準備して行くものでありたい。

たとえばクリスマスを迎えるのにどんな用意をしようかということ子どもたちと話し合う。自分たちの部屋を掃除してきれいにしよう。壁に飾るものをつくろう。貯金みたいに献金を少しずつため、フリカの子ども達に送ってあげよう。プレゼントをつくろう。(でもお母さんにはだまっていることに

して)クッキーを焼いてクリスマスの時にみんなでたべたい。劇もしたい。これらの経験を少しずつしていくうちに子どもたちはクリスマスへの期待をふくらませながら、心をこめて仕事をするこゝろや待つこゝろを身につけていく。

クリスマスって大好き!

子どもたちはクリスマスの意義を理論的に理解することはむずかしいが、クリスマス・カードや絵本のさし絵、美しい音楽、ほのぼのとしたりうそくの光り、しずかに語られる話や心をこめた祈りなどを通してクリスマスの喜びを体で感じていく。

子どもたちはイエスさまがベツレヘムの貧しい馬小屋で生まれた話や、星の降る夜に羊の番をしていた羊飼いたちに、天使があらわれ、救主降誕の喜びのしらせをもってきた話、それから「くつやのマルチン」のような心暖まる話などをきくのをたのしみに行っている。「クリスマスって大好き!」と子ども

は言う。「どうして?」とたずねると「だって、うれしいことがいっぱいあるんだもの」「毎日クリスマスだといいな」とも言う。

保育者たちは何のためのクリスマスかをよく考えて準備し、子どもたちにも聖書を開いて見せ、初めてのクリスマスの話をやさしく話したりする。スライドを何枚もうつしながら二千年前のイエスさま降誕の様子を子どもと共に見入る時も楽しい。

礼拝の中のページェント

子どもたちのたのしみに行っているクリスマスのハイライトは「ページェント」といわれる聖劇である。もともと移動舞台という意味から中世宗教劇のことを言うようになった。また一説にはクリスマスの宗教劇はアッシジのフランシス(十三世紀)にはじまるという伝説がある。町の洞穴の中に降誕の場面を再現し、フランシスは、憎しみをすてて平安を保ちなさいと町の人々に教えた。それはちやうどは

じめてのベツレヘムの夜のように大変印象的で多くの国々へひろがったことである。が、クリスマス・ページェントと名づけられるようになったのは二十世紀初めのことらしい。

それはともかく、子どもたちはページェントを毎日たのしみにして遊ぶ。昔は配役について誰がマリヤになるか、星や博士、羊はどの子どもにするかなどをきめるのに一苦勞であった。が、今は劇の特訓をして保護者に見てもらふことよりもっと子ども中心のあり方が多くなっていると思う。M幼稚園でも子どもたちがやりたい役をかわるがわる演じ、十分にたのしめるようにしている。

思う存分たのしんでからクリスマス近くになるとページェントの役を決める。(時には当日の朝にやると決まることもある。)ページェントをするにはクリスマス・ストーリーの意味を知ること、演ずる人は役割になりきってすること、会衆が一体となること等の点が大切であるとされている。M幼稚園

では当日、第一部を礼拝とし、さんびかやお祈りがあり、子どもたちのページェントが行われる。お母様達もたとえば「聖しこの夜」のさんびかの合唱をしたりして礼拝に参加する。第二部はみんなで作ったクッキーとお茶でテーブルを囲み、ゲームやプレゼント交換等をして楽しくすごす。一部も二部も子どもたちの喜びが最高潮に達し、忘れられない楽しい思い出の時となる。

ページェントと子どもたち

次に昨年度の年長組のページェントについて担任のI教諭の実践記録から引用してみよう。

「…マリヤの役については、女の子の中で希望が多かった。特にS子は去年もやりたかったのだが、病気のためできず、その思いはひとしおだったようだ。何回かマリヤをするうちに、セリフも動きもとてもよく自分のものにしていて、やりた

い”という思いが伝わってくるようだった。

M子もマリヤをしたいと思っていたのだが、彼女はいかにもM子らしく、ひかえめであった。そしていよいよクリスマスに近い日に『マリヤさんは一人で話したり、うたったりするから大きい声の出る人がいいと思う』と担任が提案したところ、意を決したようにM子が手を上げ、みごとにマリヤの役をこなしたのである。

そこで当日、担任は決めかねてS子とM子を呼んで希望を聞いた。するとS子は『マリヤさんやりたいけれど、一度もやったことのない星もやってみたい』と言い、M子は『マリヤさんやりたい』ということだった。そして担任が口をはさむ間もなく『じゃあ私が星でMちゃんがマリヤさんになればいいよ』とS子が言ったのである。今まで初めてのことは苦手だったS子が星をやってみようと思ったことも、なかなか自分の気持ちを表に出さないM子が、『どうしてもマリヤさんを



やりたい』と言ってそのためにがんばったことも驚きであった。このことはほんとうに二人の成長ぶりをよく示したこととしてうれしかった。

このように、それぞれの力を生かすようなページェントができ、子どもも親も、保育者も、思いを一つにして主のご降誕を祝うことができたのは本当に感謝である。」

それにしてもS子もM子もマリヤさんは、きだナという思いがよほど強かったらしい。マリヤがある日静かに一人で祈っていると天の使いがあらわれ、あなたは救い主になる赤ちゃんを産むでしょうと告げる場面は二人にとって、とても印象が深かったらしい。

しかしS子には星も魅力的な役であったようだ。星は沢山あるがクリスマス・ページェントに出てくる大きい星はらくだに乗った博士たちを遠い東の国から暗い夜道も光りを照らしながらイエス様の誕生

されたベツレヘムまで導いたのである。この話も子どもたちは大好きである。星のリズムも自分たちで考案し、音楽に合わせて踏むステップは軽く、自信にみちていた。

クリスマスの意味は赤ちゃんイエス様の誕生を共に喜ぶことにある。子どもたちがこの喜びを感じとってくれると同時に、様々の経験を通して一人ひとりが自分なりのクリスマスのイメージをふくらませることが出来る時であってほしいと思う。

(武蔵野相愛幼稚園)

倉橋惣三の保育目標論^①

— 心理学から保育学へ —

児玉 衣子

序

一九三五（昭和10）年7月、東京女子高等師範学校附属幼稚園は『系統的保育案の実際』という本を出版した。^②この本は、今日の保育カリキュラム書にあたる。

当時までわが国の保育は、一般的に小学校の授業と同じように保育項目（唱歌、遊戯、談話、手技、観察等）を時間割に組み、打鐘によって園内一斉に時間割に従って活動していた。^③この授業のような活動形態に対し、明治以来、児童心理学の知見にもとづき、幼児の興味や自発性を尊ぶ立場から異議を唱えたのが倉橋惣三である。彼は、旧態にかわる新しい活動形態として、ひとつの主題の下にさまざまな保育項目活動が包含される主題活動を勧め続け、この活動を昭和8年に至って「誘導保育」と名づけた。^④

『系統的保育案の実際』は、この誘導保育の行い方を紹介しただけでない。その中に組まれた四種の活動（自由遊戯、生活訓練、誘導保育、課程保育）により次のような、当時、画期的な主張がされていた。すなわち、

1、自由遊びも生活の基本的習慣の確立も保育活動である。

2、自由遊びは課業のあい間の気ばらし（放課）でなく、保育の基底である。

3、誘導保育も課程（保育項目別）保育も両方とも子どもに必要と認めて設定する。

等の画期的な主張がされていた。^⑤ そればかりでなく、

この保育案は、現在でも「今日の日本の保育構造の原型を示している」^⑥と評価されている。そして、この「系統的保育案」の構成、命名とも倉橋惣三の創案であると証言されている。^⑦

しかし、同書には保育の基本である保育目標が述べられていない。そのため、先行研究の中には同案にそれを「なし」とする論が見られる。が、言及がないからといって「なし」とするのは早計だろう。なぜなら、倉橋は、活動初期（明治45年）から保育目標を論じはじめ、「幼稚園令」発布（大正15年）後には同令中の保育目的を解釈し続けているからである。^⑧ これらの経過を見る

と、同案も当然「幼稚園令」の保育目的の下にあるという理解により記載されなかったと見る方が、むしろ妥当だろう。

では、倉橋は保育目標をどのように述べているのだろうか。昭和10年7月、日本幼稚園協会講習会で彼は、保育目標論を展開している。この論は、画期的な保育案の発刊と同時にあるところから、彼の保育目標論としてもそれまでの集大成とみてよいだろう。そこで、本稿では、まず昭和10年の論の内容をまとめ、次に、その中の同年齡集團および「素直さ」については初期から述べられていること、とくに「素直さ」は、彼独自の概念であるにもかかわらず内容説明のないところから、彼の論を歴史的に辿りそれらの内容を把握したい。最後に、それらに関する論を辿ると彼の保育目標の立て方についても構造的特徴が見出されるので、この特徴について述べたい。

一、講義「幼児性情の涵養」

昭和10年7月、先述の講習会で彼は、「幼児性情の涵養」と題して講義をした。この題目は「幼稚園令」の保育目的から採られている。また、その内容は四年前の同題目の講習の続篇にあたる。^⑨すなわち、昭和6年に彼は、幼児の本質を「純」とした上で「性情」という語の吟味を行った。そして、性情とは人が何をするか (to do) でなく、どのようなものであるか (to be)、つまり、寝ている時にさえ現れる一人ひとり異なる在り様を定義した。^⑩昭和10年になると、この性情という語の意味を再確認した上で「涵養」という語の吟味に入り、涵養とは浸す、潤す等を通して養うことであると定義する。^⑪

この「性情」と「涵養」とをあわせたところから、保育における二種類の教育的配慮、すなわち、幼児の本来善良な性情を損なわないための配慮とそれを養うための配慮との必要性が述べられる。これらの教育的配慮は、保育目的の具体化という意味で保育目標でもある。各々の内容は次のようである。

まず、幼児の本来善良な性情を損なわないための教育

的配慮であるが、幼児といえども当然ながら意識と概念 (top of) の世界に生きている。だから、幼児の意識的概念を性情本来のうっとりした生々しさに返すのが幼児の性情を損なわないための教育的配慮である。美育、お話、同年齢集団がこれにあたる。つまり、美育とは美に出会って性情本来のうっとりした気分に戻ることであり、お話とは「あなた」、「私」を話題にせず第三の話題の世界に入ることにより我を忘れることである。また、同年齢集団も力のぶつかりあいに対等で相互的であるだけでなく、互いの中に意識をひきおこしたり概念をつくり出すことが少ない。^⑫

次に、幼児の善良な性情を養うための教育的配慮であるが、彼によれば「善良」という概念には、元々、絶対不変の内容がない。そこで自然主義的、道徳的、法律的、宗教的という四種類の善良さが検討され、この内、将来宗教的方向へむかう善良さが、幼児期に涵養するのに最もふさわしい善良さとされる。そして、この将来宗教的方向へむかう善良さの具体化として「素直さ」、

「謙遜」、「感謝、敬」が挙げられ、これらは善良さの種類と辿る順序を表すだけでなく、価値的にも土台から発展を示すと述べられている。また、「素直さ」については、十八、九世紀の欧米でいわれた「従順」のように、子どもの奴隷的従順さをも正当化するような概念でない^⑬と断られている。

以上の内、同年齢集団および「素直さ」に関わる論は初期から語られている。また、「素直さ」の内容はこの論に述べられていない。さらに、保育目標でもあるこれら二種類の教育的配慮は、併置というよりも幼児の性情を「損なわず、育てる」、つまり、心情的充足から性情の涵養へという形に結ばれている。この倉橋独自の結び方についても、以前からの彼の論を辿ると一層明確になる。そこで、以下、幼児の性情の涵養に関わる彼の意見を初めからみたい。

二、同年齢集団、素直さ、保育目標の立て方

倉橋は、当初、保育目標について具体的に述べる場

合、児童心理学の成果に即して同年輩の友達を求める心理的要求の充足についてしか述べていない^⑭。しかし、実際には子ども同士はおろか大人に対してさえ「親しむ心の発達を阻害された子どものいることに気づき、そこから、一九一八（大正七）年、「親しむ心」という論において、子ども同士の関係およびそれを支え発展させる土台になる子どもと保育者との関係という保育において基本的な、幼児の二種類の対人関係での心理的充足の重要性を明らかにする^⑮。

この内、友達を求める心の要求を充足させる重要性は、一九二三（大正十二）年の「個人性格と社会性格」という論から、他者との相互生活を求める性格の成長という目標に重点が移る^⑯。つまり、この論以降、子どもの発達から生じる心理的要求は、単に充足だけを問題にするのではなく、充足において将来の性格形成を図るという方向性をも持つことにより保育目標になっていくことになる。

次に、子どもと保育者との間の「親しむ心」の涵養

は、それまでの保育では道徳教育の範疇に入っていた。

しかも、幼児の道徳教育とは当時まで幼稚園においても、小学校と同様に徳目教授が一般的であった。¹⁷⁾ 一九

一九(大正8)年、「斯く育てたしと思ふこと」と題する講演で彼は、幼児に徳目を教えこむことの有害さを訴える。そして、幼児の道徳的生活の基本は、幼児が知らず知らず「人の好意を感じる性情」を養うことであると述べる。それに加え、子どもがこの性情を養うための方法として彼は私たちに次のように述べている。すなわち、子どもが私たち大人に示す好意を残らず受けとめること、また、子どもが過ちを犯したと自覚している場合、罰の末にゆるしてやるのでなく最初から無条件にゆるすこと、この二つを方法として述べている。¹⁸⁾

この「人の好意を感じる性情」の涵養は、子どもの道徳的生活の基本とされていること。後に宇宙、自然、神へとむかうとされていること、¹⁹⁾ また、子どもが本来的にもっている他者への好意を大人が受けとめることにより育てるという方法等により、昭和10年の論の「素直

さ」の内容にあたりと思われる。しかも、この論においても幼児が本来的にもっている他者への好意は、まず、受けとめられることにより損なわれないこと、その反复において養われることが述べられている。

この後、一九三一(昭和6)年の「就学前の教育」という論文になると性情の教育とは人間性、すなわち「人間相互間における最も純真な反応性」を育てることであり、幼児の場合、「すなおさ」と「したしみ」を育てることとされるのだが、この二語の解説がない。そして、昭和10年の論に至るわけである。

三、倉橋惣三の保育目標論

—心理学から保育学へ—

以上のような経緯から、倉橋の保育目標に関する論を次のようにまとめることができるだろう。

1、倉橋は、初期から、幼児の心理的要求あるいは幼児が本来的に有する他者への好意を「損なわず、育てる」ことを保育目標として語っている。この内容が「幼稚園

令」以降、同令の保育目的の中でも幼児の「善良ナル性情ヲ涵養」という部分のみの解釈へとひき継がれている。

2、一九三五（昭和10）年に至りこの保育目的は、次の二つの保育目標、すなわち、幼児の本来善良な性情を損なわないという目標とそれを育てるという目標になる。

前者の具体的内容として美育、お話、子ども同士の関係が挙げられ、後者には後に宗教的方向へむかうところの「素直さ」、「謙遜」、「感謝、敬」が挙げられる。これらの内、子ども同士の関係と「素直さ」の内容とは、初期から、また、対人関係の範囲内で述べられていたのが、この時点に至り美育、架空の事物（お話）、神等、対人関係の枠を超えた事物と結びつけられている。

さらに、これらの保育目標の内容は、次のような特徴をみせている。すなわち、彼の活動の初期から、幼児の成長に大切な幼児の心理的要求の充足が重視され、子ども同士の関係も「素直さ」の内容も、それらの充足により子どもの善良な性情を損なわないことが、まず目標に

された。次に、現在の充足においてそれらが将来成長すべき性情へと育てられることが目標にされた。しかし、子ども同士の関係と「素直さ」の内容とは別々の目標であり、これら二つの結びつきは考察されていない。つまり、この保育目標の立て方を進めると、幼児の心理的要求であり性情の涵養につながると思われる保育目標事項の羅列になりかねない。また、これら二つは、対人関係の枠内で考察されている。

しかし、昭和10年の論になると、子ども同士の関係も「素直さ」も対人関係の枠を外され美育、お話、神等と結びつけられるとともに、これら二つにおいてさらに「損なわず、育てる」という形に置かれる。つまり、併置ならひとりの子どものそれらの各側面の成長を別個に問題にするだけである。しかし、一連に組まれることにより、ひとりの子どもの成長とは統合性があり保育内容とも関わっているということのできる視点が打ち出される。このような保育目標の関わらせ方に、倉橋の保育目標論の内容の構造的特徴を見ることができらるだろう。

さらに、昭和10年の論は、それまでの論と展開の順序が逆になっている。すなわち、従来のまず幼児の心理的要求と関わっている性情の側面を明らかにし、次にそれを「損なわず、育てる」という保育目標にするという順序が逆転し、まず保育目標が述べられている。それまでの論では性情の個々の側面について心理学から保育目標が提出されるという道筋が示されていたのに対し、この論になると、まず保育目標が提出され、心理学の成果はこの保育目標の具体化に際しその一翼に収められる。このような彼の保育目標論の特徴を一言にいうなら心理学から保育学へということができるだろう。そして、彼がこのような過程を経て彼をしての保育学への心理学の位置づけ方を示していることにおいても、彼の保育学への貢献は過去のことにとわらず、今日においても極めて示唆にとんでいるといえるだろう。

〈注〉

①、対象は性情の涵養に関する彼の論である。だから、実践を

即評価の対象にできないことがらという意味では保育目的かもしれない。しかし、以下に述べるように彼は、当初から保育目的を述べる際、目的を具体化した内容、方法についても言及している。この彼の具体化への努力に焦点をあて、「保育目標論」とした。

②、東京女子高等師範学校附属幼稚園編『系統的保育案の実際』日本幼稚園協会、昭和10。

③、この活動形態は、明治13年6月、わが国で三番目に開園した大阪、愛珠幼稚園から見られる。同園は開園に際し、お茶の水幼稚園小西信八監事に詳細な指導を仰いだ。この形態が一般化し強固であったことは、昭和8年の倉橋の講演「保育の真諦」に伺われる。

④、「幼稚園保育の真諦、並に保育案、保育過程の実際」『幼児の教育』33巻8、9号。

⑤、『系統的保育案の実際』中の「解説」（倉橋執筆）参照。

⑥、野沢正子「保育の内容と方法」『大阪社会事業短大、社会問題研究』28巻1、2合併号。

⑦、坂元彦太郎、「系統的保育案の実際」の「解説」、『大正昭和保育文献集』別巻、127頁。

⑧、「幼稚園令」には保育の目的が「幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ

其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス（第一条）と述べられていた。この文言の内、倉橋は「善良ナル性情ヲ涵養シ」に關してのみ解釈をし続けている。

考えたいとされている。

（京都大学大学院）

- ⑨、「幼児性情の涵養」『幼児の教育』35巻8、9号、なお四年前の講義は「幼児性情の涵養（一）」同31巻9号。
- ⑩、「幼児性情の涵養（一）」同31巻9号、2―7頁。
- ⑪、「幼児性情の涵養」同35巻8、9号、120―142頁。
- ⑫、同右、142―163頁。
- ⑬、「幼児の性情の涵養」同35巻11号、52頁。
- ⑭、「保育入門（一）」『婦人と子ども』14巻1号（大正3）
- ⑮、「親しむ心」同18巻3号。
- ⑯、「個人性格と社会性格」『幼児の教育』23巻2号。
- ⑰、幼稚園においても徳目教授が三年保育に整備しておこなわれていた様子を、大阪市保育会製作の「保育按表」（明治30年代後半？）に見ることが出来る。（大阪市教育センター愛珠文庫「保育按表」、修身用壁掛等参照）。
- ⑱、「斯く育てたしと思ふこと」同19巻3号。
- ⑲、ただし、この論では、この性情は後に宇宙、自然、神へむかうが、今はそこまで行かず、あくまで人間の間のことで



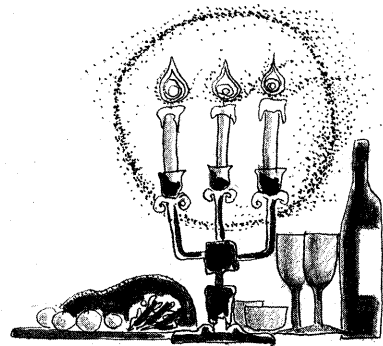
フランスのクリスマス

雨宮 裕子

静かに迎える年の暮れ

フランスに来て、何度目のクリスマスを迎えることになるのか。この国では、クリスマスはいつも静かにやって来る。

市場や、花屋の店先ぎに縦の木の鉢植えが並ぶのが十一月半ば。その頃になると、郵便受けに、連日プレゼント用品のカタログが投げ込まれる。ショーウィンドーは一際華やかに飾り立てられ、おもちゃ売場と、チョコレート売場には、とりどりの品物が山積みになされる。目



抜き通りには、ツリーや星を型どった豆ランプが取り付けられ、市庁舎前には、時計台に届く程の、豆ランプのツリーが組み立てられる。

でも、あのせわしない「ジングル・ベル」だけは、どこからも聞こえてこない。静かに着々と進められるクリスマスの準備。ヨーロッパの冬は、太陽が遠のいた分だけ暗く寒い。早々に日が暮れ、豆ランプが一斉に点ると、町がぼっと温もるようだ。春を待ちこがれる気持ちだが、冬枯れの宵に、人工の花を咲かせるのか。熊たちの

ように永い眠りにつくこともできず、暖炉の前に寄り集まって冬越えをする人々。クリスマスに交わされるささやかな贈り物も、あるいはミサのあとのご馳走も、互いを鼓舞し合う、いじらしい演出なのか。

ふと、そんなことを考えてしまう程、冬の天は重い。ここブルターニュ地方では、十一月を別名「黒い月」と言う。黒い月は、十一月一日の「万聖節」に始まる。万聖節は、祖先や死者の冥福を祈る日である。この日から新年にかけて、死者の魂が地上を徘徊するとも言われた。祖先や聖なる者へ思いをよせ、身辺を清らかに整えて、家族で静かに祝うのが、フランスのクリスマスの習慣と言えよう。

幼稚園のクリスマス

息子は幼稚園の年少組に通っている。送り迎えは、私の役目である。

十一月のある朝、

「折り紙で何か飾りを作っていただけませんか。」



▲幼稚園年少組 クリスマスツリー

と、担任の先生に、急に切り出された。一瞬とまどう私に、

「無理には言いませんが。」
と、先生は顔を赤らめた。

この先生とは、息子の入園早々、ひと悶着あった。肩にかかる長い髪を金色に染めて、まるで人形のような風情で、子どもの世界に引き籠ってしまう。教室の中へ招き入れるのは子どもだけ。親は戸口ですげなく押し戻される。教室はどこもかしこも淡いピンク。窓に、パライソンの大きなリボンが飾られ、貼ってある絵もパステル調である。

開放的だった保育園とは、うって変わった雰囲気、私はすっかり戸惑ってしまった。あんな所で、息子は一日何をしているのか。疑問が危惧に変わり、それが先生の誤解と怒りをかうことになった。

生まれ、せっかくの依頼である。私はその晩からせつと花を折り、鳥を折り、十二月の初めには、花の薬玉と、たくさんのもビールを仕上げた。

クリスマスはどう盛り上げるかは、各担任の腕次第で

ある。親たちが協力的であれば、飾りつけも、一段と華やかになる。息子のクラスの櫛の木の前には、既にプレゼントの箱や人形が置かれ、子どもたちは、サンタクロースの貼り絵に勢を出していた。年長組の廊下には、

東方の三博士や、サンタクロースの絵が貼られている。息子のクラスでは、先生がクリスマスを、サンタが贈

◀ 幼稚園年長組 サンタの絵



り物を持って来る日と話したらしい。息子は、さっそくサンタの歌を自作した。

「サンタは、天から降りてくる。煙突から暖炉へ降りてくる。それから、プレゼントをくれる。それから…」

と歌いながら、ふと言ったものだ。

「日本のおじいちゃんの家はかわいそうだね。煙突がないから、サンタがこないね。」

幼稚園のクリスマス会は、冬休みに入る前に行われるので、十日程早い。この日は給食も特別メニューである。

キャロリーヌ風サラダ

羊のもののロースト、いんげんのソテー添え

みかん

クリスマスの丸太ケーキ

羊のもの丸焼きは、家庭でも一番のご馳走献立である。

そんなものを食べて、ゆっくり昼寝をした後で、今度



▲幼稚園年少組 クリスマス会

はクラスごとのクリスマス会が始まる。静かな音楽が流れる中、先生がテーブルにろうそくを点して回る。おやつは、ホットシヨコラとマドレーヌ。

息子には大満足の日であった。

会社のクリスマス

クリスマスのお祝いは、もう一つ別の所からもやって来る。会社だが、社員の子どもたち用に、クリスマス会を開いてくれるのだ。対象は小学生ぐらいまでで、比較的新しい習慣とのことである。

去年はサーカスだった。今年はユゴーの「レ・ミゼラブル」をもとにした、バレエ劇だ。関連会社合同で、劇場を借り切ったのクリスマス会である。一時間そこそこの出し物だが、あきってしまったも、途中で帰る子は一人もない。みんな我慢して、おしまいまでじっと座っている。なにしろ、プレゼントは一番最後に控えているのだから。

プレゼントは、春先に回覧されるカタログから、親が

あらかじめ選んでおく。あんまり早く選ばされるので、親の方も何であったか忘れてしまい、去年は同じ積木を買ってしまった。

会場では劇が終わり、アルファベットの抽選に入った。選ばれた文字が頭に付く名前の子どもが、自分の贈り物をもらいに行けるのだ。贈り物には、チョコレートボンボンが一袋ずつ添えられる。普段は絶対にもらえないお菓子である。息子は顔を上気させて、袋をにぎりしめている。それを、どうごまかして取り上げたものか、この時期は、お菓子攻勢との戦いでもある。

我が家のクリスマス

クリスマスはいつも、夫の家族と、海辺の小さな村の別荘で迎える。我々が着く頃には、義母があらたに飾りつけを済ましておいてくれるので、子どもたちは、我先にききツリーの前にかけつける。

ツリーには、赤や金、銀の玉、小箱や人形がゆれ、根元には大小のプレゼントが置かれている。その前に並ぶ

のは、たくさんのサントン人形で、キリストが生まれた馬小屋と、ガリラヤの町を再現している。サントンは、小さな聖者を意味する。粘土に彩色した人形で、小さいものは親指ほどの大きさである。ひざまずくマリアとジョゼフの間には、まどろみ 秣桶に寝る幼な子、その後には牛と馬がのぞいている。前には天使と羊飼い、後には祝福に向かうガリラヤの人々が配される。

義母はサントン人形を毎年少しずつ買い揃えて、今では何十体あることか。糸を紡ぐ女あり、粉をひく男あり。それを一体ずつ、真綿からていねいに取り出して、並べていくのだ。

我々は、その周りに飾る小道具集めを頼まれて、森へでかける。必要なのは、ふんわりした緑ごけ、古びた木の枝、松ぼっくり、小石、ひいらぎ。ひいらぎは、「ギ」と呼ばれる宿り木と組ませて、戸口のリースにも取り付ける。ギは一種の縁起もので、クリスマスから新年にかけて、戸口に吊しておく家が多い。

晚餐の用意は前日から始める。子どもたちが、近所の



▲海の別荘 暖炉の右手に飾られた丸太

農家へ兎を見に行っている間に、私は甘いおつまみを作ってしまう。くるみを割って、アーモンドペーストやプラムでくるみ、それに粉砂糖をまぶすのだ。義母は、ビュッシュ・ド・ノエルという、丸太型のケーキ作りにかかる。薄いスポンジを焼いて巻き、クリームで丸太に似せて作る、見た目も味も地味なケーキだ。でも、クリスマス晩は、これでなければならぬ。丸太には、ゲルマンの木の信仰に連なる、古い伝統があるからだ。もともとは、太く長い丸太を暖炉にくべ、それが長く燃え続けるのを、長寿の印として祝った。それが転じて、食べられる丸太となり、永遠の生命を体内に取り込む儀式となったのである。

義母は、暖炉用の丸太も、必ず一本特別に飾っておく。その丸太は、クリスマスの夜にくべられ、燃えた灰は、魔除けとして家の四隅にまかれる。

さて二十五日の夜。子どもたちは、「寝ない子の所には、サンタがこない」と義母に言いくるめられ、靴を片方ずつ枕もとに置いてしぶしぶベッドに入る。我々はミ

サの時間を待ちながら、フォワ・グラヤやキャビアのカップで、軽くお腹を満たしておく。

村のミサは九時半に始まる。近隣からも人が集まるので、教会の中は、たちまち一杯になる。司祭はまず、香炉をふって堂内を清めた。それから祭壇に上ると、我々をゆっくり見渡して、聖書の一節を語りだした…。

海鳴りと、満天の星に包まれた帰り路、澄んだ心に浮かぶのは、待ちうけるご馳走の数々。生ガキ、七面鳥のロースト、丸太ケーキ、トリュッフ・チョコ…。まずはシャンパンを抜いて乾杯から。

冬の夜長、手作りの晚餐がゆっくり始まる。

(フランス在住)

アトランタのクリスマス

入江 礼子

(ピーチツリーシティー)

我が家は、アメリカはジョージア州アトランタ近郊のピーチツリーシティーという人口一万七千人余りの小さな町に住んでいます。このピーチツリーシティーは、今から丁度三十年前、綿密な開発計画のもとに作られた比較的新しい町です。住人は、もともと南部出身の人に加えて、北部や西部から移り住んで来た人、それに私達のような日本人も小さな町の割には多く、四百人余りが住

んでいます。ですからアメリカの南部といっても、生粋の南部とは言いにくい側面もっています。どちらかというとな産階級が多く、多くの南部の典型的な古い町のように、とびきりの大金持ちもいなければ、いわゆる貧困層にあたる人々もほとんどいません。教育に対しても熱心な人の比率が高く、質の高い公立学校を持っていることを住民は誇りにすらしています。

こんな背景を持った我が町のクリスマス風景を、これ



から御紹介しようと思います。

(サンクスギビングが終わったら……)

11月23、24日、こちらはサンクスギビングの休日となります。この休日があけると、町は文字通りクリスマスカラー一色(？いえ、赤、緑、白の三色かもしれませぬ)になります。市庁舎の前庭には、大きなクリスマスツリーが立てられ、夜は明かりがともし、否が応でもクリスマスが近いことを感じさせられます。大きなスーパーマーケットも、デパートも、小さな小売店も専門店も一斉にクリスマス色に模様替えとなります。(ただし、日本のデパートのように店内放送で、ジングル・ベルのようないわゆるクリスマスソングが流れることは、全くといってよいほどありません。)

(小学校でも家庭でも)

特に学校、それも幼稚園から小学校の三年生までが通っている小学校の内部の飾りつけは、それは見事なも

のです。先生、生徒は言うに及ばず、ボランティアの母親が「私のクラスこそ一番素敵！」とばかりクリスマス用のディスプレイ(飾りつけ)に凝りに凝ります。日本では、幼稚園などで、その種の飾りつけが行われることがあります。その規模の大きさ、皆が集中する様子は、日本の比ではありません。下の娘のクラスは、クラスの入りのドアがすでに大きなクリスマス用のリース(輪かざり)でかざられ、外側の壁には、大きなサンタクロースの絵(主に色画用紙で作ってあります。)これは主にボランティアで出た母親の仕事で、そのままりを飾るこまごまとしたものは、母親達の指導のもとに、子ども達がつくりまします。教室の中に入れば、クリスマス用の靴下あり、やはり色画用紙で作ったろうそくや兵隊さんなどが、目にとび込んできます。

これらのものは、アート(美術)の時間に主につくられ、次々と教室をうめていきます。そしてクリスマス休暇に入る直前、下の娘の所属していた一年生は、全部集まって、いわゆるクリスマス集会をやり、ミスター・サ

ンタとミセス・サンタの出でくるクリスマス劇をやりました。クライマックスはクラスでのプレゼントの交換でして、息子の所屬していた三年生は、そのデイスプレイの他に、母親達のボランテニアがついて、"ジンジャーブレッドハウス"という、丁度"ヘンゼルとグレーテル"のお話に出てくるような"お菓子の家"をそれぞれの子どもが作りました。卵白を泡立てパウダーシュガーとターターという凝固剤を入れ、それを家の形にしたジンジャーブレッドにぬりつけ(一種ののりの役目をします)ます。まっ白なので、みるからに雪をかぶった家という風情となり、それに、子ども達が思い思いに持ちよったキャンディー、チョコレート、ガムなどをはりつけ、見ていて楽しいお菓子の家が出来あがりというわけです。(息子はこれが大そう気に入り、この夏、アリが出没するまで、我が家の暖炉のところ飾っていました)そして、極めつけは、三年生全体で、遠足をおかねて、スクールバスに乗って、アトランタバレエ団の

"ナッツ・クラッカー"(くるみ割り人形)を観に行き

ます。ペーター・ベンの第九交響曲が日本の年末に欠かせないように、ここでは"ナッツ・クラッカー"を見に行くことが、いやがうえでもクリスマス気分を盛りあげてくれるのです。

(家庭でも……)

この子ども達のクリスマスの最大の楽しみは、宗教的なことよりも、むしろ日本と同じサンタクロースの来訪を待つことです。特に、サンタを信じている小さな子ども達にとって、この楽しみは、何ものにもかえられないものとなっています。12月に入ると、各々の家庭で大きなクリスマスツリーが飾られ(大てい150〜200cmくらいある)それが居間などの窓辺にかざられることが多いのです。自分で作ったオーナメントを思い思いにかざるのは、日本とかわりありませんが、何しろ木が大きいので、"クリスマスが来るぞう!"という気分がいやが上にも高まります。各々のソックスが暖炉わきにつるさず、子ども達は、クリスマス・イブだけは暖炉をたいて

くれるなど親に必死にたのみです。そうするとサンタクロースが入れないからです。教会に行っている家庭では、教会でもクリスマスを待つ行事が次々と進行していきます。

(ライトで照らし出される家々、そしてクリスマス)

12月も10日頃には、かなりの割合の家々が、家のアウトラインが浮き出るように豆電球をかざりつけます。日本のようにほとんど街燈のない町の夜はまっくらなのですが、年に一度のこの飾りつけは、まるで夢の国のような美しい風景となります。各デヴィジョン(地区)ごとにその美しさを競うのは、日本の七夕祭りの賞を決めるのと同じです。12月も20日頃になると、夜になると、そういう美しい飾りつけをみようという車がいっぱい出て、渋滞などついぞないこの町も、この時ばかりは美しいデヴィジョンの前では渋滞となります。この風習は、もとはといえばドイツの風習なのだそうです。移民の国アメリカでは、祖国の祝い方を守り続けている人もいれ

ば、色々ととり入れている人もいます。これはドイツの風習、これはメキシコ等数えあげればきりがありませんが、それらが混じりあい、すべてを楽しんでしまうところはこの国の真骨頂があるように思えます。こうして待ちに待ったクリスマス。その日は、日本の元旦のように静けさにつつまれ、家族と共に祝うようです。

約一か月にわたって、ありとあらゆる楽しみを集中させ、待つことの喜びをうたいあげるアメリカのこの小さな町のクリスマス。厳肅なその日を迎えたあとは、思い思いのクリスマス休暇を楽しむこととなります。

(アメリカ在住)

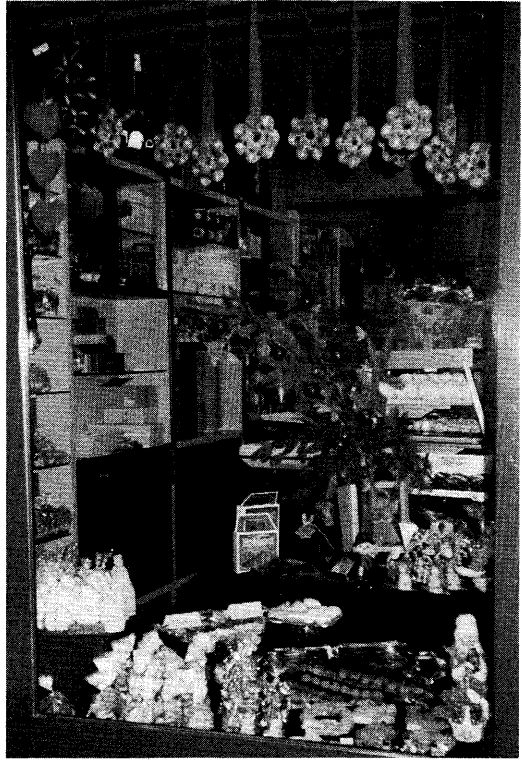
西ドイツのクリスマス

美谷島いく子

西ドイツの大学街マールブルクにも、十一月十一日の聖マルティン祭が終わると日毎に空の暗さが増し、根雪が降る。ライン河が凍り始め、寒い日が続くと全面結氷する。子ども達は、雪合戦、橇や氷滑りに興ずる。寒さが緩み川霧が出ると、翌朝は美しい樹氷が見られる。霧深く、雪と氷に閉ざされ、太陽の光の少ないこの季節は、社交シーズンの到来でもある。パーティや観劇の席で、最大の年中行事であるクリスマスのことが話題になり始め、人々はその準備に忙しくなる。

古い商店街オーバー・シュタットには、星とS字型の

イルミネーション電飾がアーチ状に付けられ、毛皮に身を包んだ買物客で賑う。老舗にはキリスト生誕の人形が飾られ、雪の舞う石畳の道辻には樅の木や寄生木ミステル売りの声が響く。お菓子屋には、パイプをくわえたヴァイナハトマンの菓子パン、チョコレートやクッキーでできた御菓子の家、聖ニコラウス、雪達磨、天使や豚のマーチパン、樅に吊す花や星型のレープクーヘン（蜂蜜入りクッキー・写真①）が並ぶ。十一月末には、市庁舎、エリザベート教会の前に、大きな樅の木が立てられた。家々の軒には、寄生木がほんほりのように丸く束ねて吊され、庭や窓辺も



①御菓子屋の店先

それぞれの趣向で飾られ、外出の際の楽しみだった。

(1)アドヴェント(待降節・降臨節)

ヴァイナハト
降臨節だけを祝うのではなく、四回前の日曜日から降臨節までの間、準備をしながらクリスマスの降臨を静かに待ち臨む期間である。待降節の第一日曜に戸外の樅の木に灯が燈される。この期間に緑の小枝で輪を作り、アド

形のチョコレートが入っている。

伝統的な御菓子ヴァイナハトシュトレンやレープク

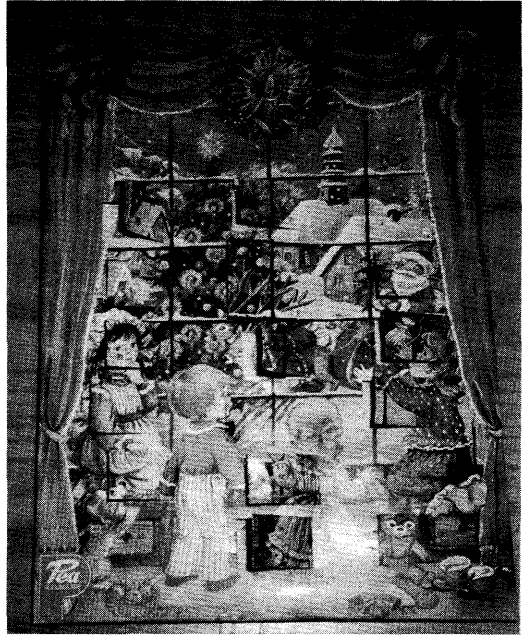
ヘン作りには、可愛い娘の手も加わってくれた。幼子イエスのくるまった毛布の形に焼きあがった熱々のシュトレンを天火から出すと、今年もこれでやっと降臨節を迎えられると、ほっとしながら仕上げの粉砂糖こなを飾う。

家族や友達がアドヴェントクラッツの回りに集まり、

ヴェントクラッツと言って四本の蠟燭を立てる。最初の日曜に一本火を燈し、次の日曜に二本目にも火を付け、四本すべてに火が燈されると、次には待ちに待った降臨節がくる。

この間、娘にとって朝一番の楽しみは、ベット際の壁に飾ったアドヴェント・カレンダー(写真②)である。

クリスマスに因んだ絵に一から二十四の数字が書かれ、扉になっている。毎日一つずつ開けると、様々の



②アドヴェント・カレンダー

楽しく幸福な時間である。降誕節当日まで何日も待って／＼過ごすことにより、聖ニコラウスをはじめとする様々の夢想は、豊かに広がり、巡り、賑らんで、確かなものになってゆくのであるから。

(2)ヴァイナハト・マルクト

子どもの大好きな露店市、ヴァイナハト・マルクトが開かれるのも、アドヴェント中である。十二月一日から二十二日まで、エリザベート教会の境内はテントの露店で賑う。切りたての樅の木、

蠟燭の上昇するように垂直にゆらめく焰を見つめ、この一年間のことに思いを巡らしゆったりとした時間を過ごす。胡桃割り人形で胡桃を割って食べたり、パイプ人形で香と煙を楽しんだり、ヴァイナハト・ピラミッドの光と影を堪能するのもこの時である。蠟燭の焰を見つめて、何年も昔々の最初の降誕節に思いを馳せながらその日を静かに待ちわびるアドヴェントは、子どもにとって

ツリーの飾り（鉛、錫、麦わら、木製、胡桃割り人形、パイプ人形、色鮮やかな蠟燭、人形の家の調度品、手作りのクリスマスカード、茶や青系の陶器マールブルク焼、クッキーやケーキ型等々のクリスマス用品が並ぶ。ここで売られている商品は、日本の縁目のもののようにその日限りの果敢ないものでなく、クリスマス毎に長い年月使い続けることができる品が多い。その為か実質的

で堅固な代わりに高価である。

子ども達は食べ物店の方に群がっている。ハート形のレープクーヘン、小熊のぐみ、マシュマロの白鼠や赤い砂糖菓子、馬蹄型、豚や魚のマーチパン、チョコバナナ、甘栗にポップコーン、綿飴や棒のキャンディ。厳しい寒さの中なので、焼きたての蜂蜜たっぶりのクレープや、熱々のブルストをはさんだブロートヒェンと、紙コップ入りの熱いスープやホットワインを片手に歩き廻る人が多い。一隅には天井にメルヒェンの絵が描かれた回転木馬がすえられ、吹雪の中、子どもを乗せて回っていた。

玩具の産地であるニュールンベルクのヴァイナハト・マルクト(写真③)は、大規模で有名である。ルードイッヒ・リヒターは、二人の幼い子が人形を売っているドレスデンのヴァイナハト・マルクトの絵(絵④)を残している。(二八五三年)

③ニュールンベルクのヴァイナハト・マルクト



二十三日、前を通ると、すべての露店は跡形もなく消え去り、昨日までの賑いが嘘のようだった。十三世紀建立という教会の二本の尖塔が寒空に聳え立ち、そこに吊された鐘が、聖なる時の訪れを祝福するかのようになり、人気がない庭に清しく鳴り響いていた。

(3) 聖ニコラウスとルブレヒト

十二月五日の夜は、聖ニコラウスが下男ルブレヒトを連れ、玄関の戸を叩く。僧侶姿の聖ニコラウスと粗末な格好で贈物の袋と鞭を持ったルブレヒトは、家に入り、子どもにこの一年良い子だったか悪戯をしなかった



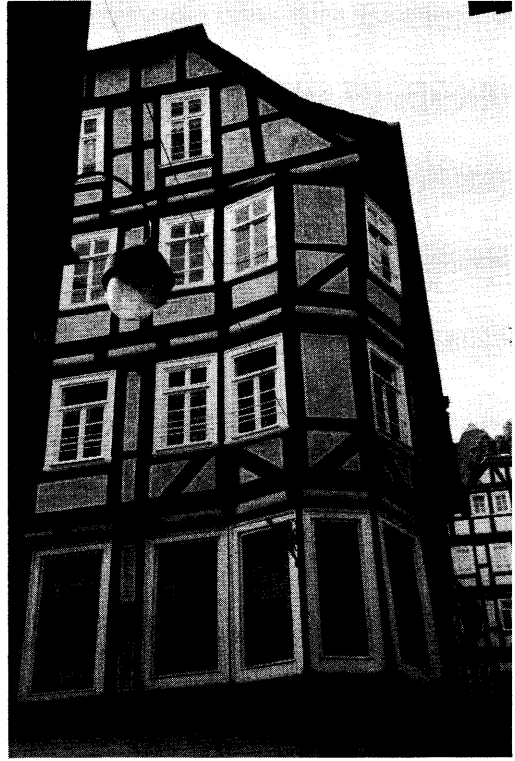
④ ドレスデンのヴァイナハト・マルクト
(1853年) Ludwig Richter 絵

かをたずね、闇魔帳に記入する。悪い子には鞭を、良い子には贈物を与え、もうすぐやってくる降誕節を祝う。場所によって克蘭プスという鬼を連れてくる所もある。一年の終りに子どもを罪を悔い改めさせるこの行事は、男鹿半島の生剝なまはくに似る。

(4) アドヴェントに生まれた子どもの本人々は、アドヴェントの期間に、愛する人への贈物を何にしようかと考えを巡らせる。ドイツでは、世界の子どもに親しまれ続けることになった二冊の本が、アドヴェントの期間に生まれたことを忘れることができない。

『子どもと家庭の童話』

百八十七年昔、市庁舎の近く、パール・ヒューサー通りにグリム兄弟が、マールブルク大の法科の学生として下宿(写真⑤)していた。グリムは、ザヴィーニ教授の



⑤グリム兄弟の下宿

とその長男に捧げた。黄金に縁取りされ常磐木の緑色の装丁のグリム童話を、世界の誰よりも先に、ヴァイナハトの朝、手にすることができたベッティーナの心は、どんなにか弾んだであらう。彼女縁の地がベッティーナ・トウルムとして苔生している。

紙も印刷も粗末で、挿絵もない地味な本であったが、私達が親しんできた「墓の王様」「狼と七匹の子山羊」「赤頭巾」「ヘンゼルとグレーテル」「灰か

もとで後期浪漫派の人との交りの中、グリム童話の種を育み始めていた。グリム童話の原形は、エーレンベルク原稿に先駆けてザヴィーニの子どもに送った手紙に遡るといふ。ザヴィーニの家も、エングガッセを登った所に残っている。大学入学から十年後の一八二二年のアド

ヴェントに、ベルリンのライマー書店から『子どもと家庭の童話』を刊行し、ベッティーナ・フォン・アルニム

ぶり」「白雪姫」「いばら姫」等の話は、この初版に収められている。当時ドイツはナポレオンの支配下で厳しい状態だったが、アドヴェントの豊饒な時間から、聖書に次いで世界中の子どもに読まれることになったグリム童話は、産声をあげた。

『もじゃもじゃペーター』

一八四四年のヴァイナハトの一週間前に、フランクフ

ルトの医者、ハインリッヒ・ホフマンは、三歳半の長男の贈物に、絵本を買いに街へ出た。しかし、気に入った絵本が見つからない。仕方なく、一冊のノートを買って帰り、自分で絵を描き、詩をそえて一冊の絵本を作った。それが『もじゃもじゃペーター』である。私は、もじゃもじゃペーター博物館やグーテンベルグ博物館で、ホフマンの古い版のこの絵本を見ることができた。蠟燭とガラス球とクッキーの飾られた二本のツリー、絵本を持つ天使、玩具で遊んでいる男児等をつないでいる、素朴で稚拙とも言える唐草模様のかすれたインクからは、ヴァイナハトを前にして、息子の為にペンを急がせているホフマンの、優しい息使いが聞こえてくる。この絵は、その時即座に生まれたのではなく、彼が診察の折に、泣き騒ぐ子どもに描いてやった「腕白フリード」
「可哀相なパウリちゃん」「スूपズぎらいのカスパル」
「指なめ小僧」「行儀の悪いフィリップ」「もじゃもじゃペーター」等の描き慣れたものだった。しかし、これらの断片的な絵が一冊の絵本として結晶したのは、アド



ヴェントの豊饒な時間の成せる業に違いない。翌、一八四五年のヴァイナハトに、初版千五百部が出版された。



⑥メルヒェンを語るグリム家の乳母Ewig
1829年 降誕節
Ludwig Emiel Grimm 絵

降誕節は、家族だけで静かに過ごす。屋内のツリーは、二十四日に子どもがいらない所で飾り、鈴の合図で子どもを部屋に入れて初めて見せる(絵⑥)。この時の贈物は、幼子イエスからという。エンテの食卓を囲んだ後、家族で教会の夜のミサに行った。帰りには雪が舞い

始めた。四百五十年前には修道院だったアルテ・ユニの坂には、何本もの蠟燭が立ち、灯が燈っていた。
大晦日シルベスターは、親類、友人が集り賑やかに過ごす。豚が古語では次の月を呼び、幸福を運んでくるので、豚のマーチパンを食べたり、豚の置き物を飾る。夜中の十二時と同時に教会の鐘が鳴り響き、家々では花火を打ち上げ、新年の訪れを祝う。花火は古い悪霊を追い出す意味がある。山城の周りに上がる花火が、垂れ柳のように美しかった。

(5) 燠いぶ十二夜

十二月二十五日降誕節から一月六日公頭節ヘビクニヤまでを燠十二夜という。この時期は冬至の頃に当たり、太陽の光を見ることが少ない。自然が猛威をふるい、大雪や嵐に襲われることが多い。ゲルマンの伝承によれば、

十二夜の間、風神ヴォータンが白馬に跨り天空を駆け巡り、その親族ペルヒタ、ホレ、エツカルト、コーボルトもそれに続き、先祖の霊や悪霊もあたりを跳梁しているという。この禍禍しい中で、人々は不安に戦^{おの}き、太陽の再生、春の再来を待ち望んで焚火をしたり、蓬や葉草を燻して、災や悪霊を追い放つたことから燻十二夜と呼ばれる。人々は、子どもによって行われる「三博士の門付け」を、春の訪れを告げる最初のものとして待ちわびている。

友人から聞いたところによると、ドナウ河畔の古都レーゲンスブルクでは、三博士の門付けが行われている。一月六日に、三博士（又は星の歌い手）が、家々を回る。三人の少年が、東方風のカスパール、メルキオール、バルタザールに変装する。カスパールは顔を真黒に塗る。手には各々、乳香、没薬、黄金を携える。三博士は、棒の先に付けた星を運ぶ一人の少年を先頭に立たせ、二、三人のお供がいる。三博士の一行は家々を回り、ツリーの前で、飼葉桶の中のイエスの為に伝統的な

歌を歌う。三博士の一人は、乳香の炉を携えているので香が漂う。彼等は去る前に、入口の梁上^はに三博士の頭文字と年号（C.M.H.B. 1989）を書く。節分の十二書のように、家に災や悪霊が入らない為に。子どもは、御礼にクッキーやお金を貰い、歌を歌ってから雪道を進んでゆく。

ツリーやキリスト生誕の人形は、この一月六日に片付けられる。飾りを取り去ったツリーは、庭に出され、厳しい寒さと大雪の中でも小鳥が餓死しないように、四十二雀のとまる為の輪や、餌袋を吊して、再び雪の中に立てられる。

（松本市在住）

子どもにとって楽しい

音楽リズムのあり方を考える(5)

原口 純子

7、劇あそび、オペレッタ(生活発表会とは何か)年長

オペレッタ、「森の詩 パートⅡ——金のがちょうを探しに」年長かえて組の経験、活動。生活発表会は、歌、踊り、台詞を中心に音楽劇を構成し、一つの課題を中心に活動する一種の課題活動である。音楽リズムを中心とした総合活動として、どのように構成し、運営されていくかをかえて組のケースを中心にまとめてみる。

(1) クラスの実態

男児18人 女児16人 計34人 年少時より学級担任が四回変わり、今回生活発表会をしたのは9月からクラスを



持ったばかりの担任である。クラス全体がやや落ちつきとまとまりに欠ける。自己中心的な子が多く、クラス全体をリードしていくようなリーダーはいない。生活発表会に当たっては主任が補佐に当たった。

(2) テーマの選択理由

運動会終了後もテープをかけては白雪姫ごっこをしている子どもたちの実態から、この話に「金のがちょう」の話をとり入れて変化をもたせパートⅡとして創作した。

(3) 構成と配役 主な経験

花の精 8人、お姫様 8人 踊り——台詞——わら

べうた（鬼きめうた、つるつる）——鬼に変身、うた

（こまったな）——応援、がんばれポーズ

王子様 9人 歌（ラララ王子）——台詞——とびば

こ、ガキガキ岩のぼり、金のがちょうを見つける

魔法使い 9人 歌——台詞——鬼の魔法をかける——

一本橋渡り——岩のぼり

フィナーレ フォークダンス——制作、小道具作り、木

をつくる

〈事例と考察〉

事例17 一度使った曲で踊りを変えられない。

教師はお姫様の踊りを、曲は運動会の曲そのまま振りつけのみを少し複雑に変化させたいと考えた。キャンディワルツを流して、「少し変えてみようか」と提案し、教師が踊ってみると子どもたちも教師のとおり踊るが、教師がぬけると、また昔の踊り方にもどってしまった。後から新しい動きを表現させても音楽がなると反射的に以前身についた動きにもどってしまう。

〈考察〉

子どもの経験はすり込み効果が大きく、一旦身につけたもの、おぼえたものを後で変更することは非常にむずかしいことを示している。このことは幼児教育全般についても言えることで、初期経験の大切さであり、幼児教育の大切さをも示している。

事例18 教師の提案を拒否するC子

曲に合わせて自分たちで動きを考えるが、お姫様の踊りで教師が「ここ、こういう風なのはどうかしら」と提案

してもC子は「イヤッ」と強い言葉で拒否して自分の思った通りに全体を動かしたい。強いリーダーで自分をゆずったり、他人の意見をとり入れることのできない強い子どもの意見に全体がひきずられる傾向がある。

〈考察〉

子どもが育つということは、自分の意見を持てるということであり、又他人の意見をも聞く耳を持つることである。これまでの生活の中で、ままとにししろ、他の遊びの中にししろ、自分の思う通り我ままいっばいにする、まってきたC子にしてみれば教師の提案であるうと、気に入らないものは「イヤッ」と断固拒否するのは不思議ではない。生活発表会を経験する中で、個々の子どもの様々な側面の育ちがあらわになる。

事例19 自信のある子から順に並ぶ序列が決まる

魔法使い役は男児6人いるが、出てくる順番や並び方は教師は何も指示していない。が、出てくる順番や岩登りをする順がいつも力の強いA男を先頭に力の強い順に決まってくる。台詞や動作、歌などもはっきりやるのは

前の3人ぐらいで後の6人は台詞も歌もよく覚えていない様子である。後の方にこそそそくつついて並んでいるだけで、課題への意欲も熱意もうかがえない。

〈考察〉

先頭にいるA男は四月生まれで何をするにも教師の意図をくみ、的確に行動することができる。友だち関係においてもリーダー格で他の子に尊敬されている。又後についている子どもたちは生まれの遅い子どもたちが多い。集中する力、課題意識など内面の成長も歴年令の育ちと関係している傾向がうかがわれる。

事例20 金のがちょうを持つ人になりたくてトラブルが起こる

魔法使いのところにある金のがちょうを王子がみつけ、もらう場面で、何回やっても、誰か金のがちょうをもらう役になるかで毎回けんかが起こる。そこで事前に順番を決めておくが、尚、その場になると持ちたい子が手を出す為ゴタゴタが起こって劇が中断される。

〈考察〉

子どもは劇全体をよく理解してその流れの中で役になりきっているとは言えない。金のがちょうを持ちたいというのは地の自分がまる出しになっている。自分の欲求や欲望が役を越えて、生にぶつかりあい、トラブルが起きて、劇が中断されようとも我を張り合うことになる。

(4) 生活発表会の意味と問題

生活発表会というのは正に子どもの育ちそのものが現れるものである。劇又はオペレッタというクラス全体でとりかかる課題活動は、四月から、子どもたちがさまざまに遊びや生活を通してどう育ってきたかによって大きく影響される。単に劇やオペレッタが上手に演じられたかどうかの表面上の問題ではなく、そこに到る過程が問題である。レコードに合わせて教師の言いなりになっていけば猿まわしの猿のような劇ではなく自らのものとして主体的にとりくめるためには個々の内面的なものが育っていなければならない。従ってクラスの子どもたちの育ちに合わせてというのはそれらの育ちのことである。

内面の育ちを次のように考える

(ア) 教師と子どもの信頼関係 ↓ 担任がクラスの子どもの気持ちをどの程度掌握しているか

(イ) クラスの仲間意識 ↓ 良い友だち関係が形成されているか、クラスのためにがんばろう

(ウ) 課題意識 ↓ 生活発表会を自分たちの課題としてがんばろうとする気持ちを持てる

(エ) 自制心、がまんする心 ↓ 多少いやでもがまんする力、待つ事、他人にゆずる気持ち

(オ) 自分の意見を述べ、他人の意見も聞く ↓ おどりの振りや台詞を考えたり提案する

(カ) 意欲、やる気 ↓ 自分からしようとする気持ち、事に当たってがんばろうとする意欲

(キ) うたうこと、おどること、その他とび箱やなわとびに挑戦してがんばる気持ち

以上の七点は教えてできるものではなく実に細々とした四月からの遊びやただの生活のつみ重ねの中で育てられてくるものであることがわかる。これらのものがしっかりと育っていないとクラスでまとまった劇遊びは、む

ずかしいことがわかる。

オペレッタを通して見えてきた子どもの実態

(1)子どもの自己中心性

・自分の気持ちのままに我を

張って他人の意見を聞こう

としない

・一番になりたい、金のが

ちようを持ちたいととり合

いやケンカをする

(2)集中できない——一つの事をしようとしても勝手にお

しゃべりをしたりして集中できぬ。

(3)本気で事に当たれない

王子の役をやっているのに

(4)意欲の乏しさ

台詞や歌もよくおぼえず先

頭の人にただついてまわっ

ている後の子ども

(4)気分が不安定で、注意されるとふてくされ気持ちが頑

固になる

(5)散漫で持続力が乏しい——劇中のバックに使う木を作

る時に「やるやる」と威勢良く参加してくるもの

5分とたたないうちにあきて他の方にさって行く。

(6)他人のことはやたらに大声で非難するが、自分では決

して責任をとらず他人のせいにする。

子どもの実態というのは以上のことから、心の発達、

気持ちの発達であることがわかる。子どもの意欲や興味

に合わせて、オペレッタのテーマや素材を考えていかな

いと、無理な課題を背負わせ先生も子どもも苦勞をする

ことになる。

台詞の問題、劇やオペレッタと野外劇のちがいは台詞

の有無のちがいでもある。原則として文字の知識を持た

ない幼児に長い台詞を暗記させようとすればいきおいオ

ムガエシに何度も言っておぼえさせることになるし、

よほど意欲や主体性がない限りおぼえ切れないことにな

る。従って幼児の劇を台詞によつてはこぶことは、不適

当であることがわかる。大人さえも長々と台詞を暗記す

ることは困難であることを考えればなおさらである。こ

く筋にそった単純なせりふ、例えば「私は野ねずみで

す」○○さんくんには「程度のものであれば無理を

しないですむ。子どもの台詞の程度は彼らが日常生活の中でおこなうままごとや、さまざまなかっこ遊びの会話を通じて聞かせるというのとは、ごく限られた子どもである。

音量からいって四歳又は五歳の子どもが舞台の上で話して聞かせるというのはごく限られた子どもである。この点からすれば幼児の劇遊びはプレイルームを用いず保育室を用いる考え方は一つの方便である。プレイルームでおこなう場合は4、5名から10名程度の子どもが声をそろえて台詞を言うことになるが、これもどんなに簡単な会話でも、言い始めのタイミング、全体の速度などむつかしいことである。そうしないとガサガサになってしまうことから何度も練習をしないとできないことになる。わらべうたや歌になっていくものはかなりの長さも平気で楽しんで言えること、タイミングが伴奏でそろえられること、音量が上ること、幼児の劇がオペレッタ形式になってうたいながらすすめられ、教師のナレーションで物語が補足説明されてすすめられることは合理的なことと言えらる。このことから幼児向のオペレッタや劇遊

びのレコードや脚本集が多く出ているが、音から台詞から動きまで全て決まっている既製品に子どもを合わせることは、レコードや脚本にふりまわされ子どもの表現力も教師の創造性も生かされる余地はなく、何のためにオペレッタをしているかわからなくなる。

(5) 指導のポイント

(ア) クラスの実態により、脚本選定が、今の自分のクラスの子どもたちの育ちに合っているかどうか。(集中力、仲間の育ち、意欲) その程度によってストーリー性、劇の山場をいくつもって来れるか、台詞の量、歌やダンス、体育的なとび箱や側転等の課題の量と質が決められてくる。

(イ) 子どもがストーリーをよく理解していること。何がどうなる話して、その中で自分はどの役をやっているかがわかっていくこと

(ウ) 次の動作へのメリハリがはっきりしていること。例、

花の踊りが終わったら花は後にさがってお姫様が登場する。という具合にAの次はB、という動きが子ども

に明瞭にわかること。ストーリーで動いているというように、子どもはその場の合図や明解な変化に従って動いている。これが理解できることにより、教師の指示によって動くのではなく、子ども自身で動けるようになる。

◇劇のねらっているものは何か——まとめ

クラスが一つになって力を合わせて一つの劇をつくりあげることであり、その中に歌うこと、踊ること、ストーリーを展開すること、必要なさまざまな小道具を作ることなど、多くの要素の含まれた総合活動である。しかし現実によつてみて、生活発表会というのは、おもて面をつくろうことのできない内面の育ちを表現するものと考えなければならぬ。いかに教師が力んで踊りや台詞を教えようとしても、子どもの側に意欲や自覚ややる気が育っていないと教師のからまわりになりおぼえない。やる気もないことになり、教師も子どもも苦勞ばかりすることになる。意欲ややる気、自覚というのはどういう経験を通して育ってくるのであろうか。クラスによって

も、子どもの個人差としてもバラつきが大きい。園ではひどく無気力に見える子どもが家に帰って母親の前で演じたり、歌ったり、発表会の日を前に緊張していたことなどを後日聞くと、園で見る無気力が全てでないこともわかる。子どもの能力、発達特性から生活発表会だからといって大人の演劇スタイルのものを求めてはならないし、もっと子どもに向いたスタイルのものを考え、楽しんでできるものでなければならぬ。「何の劇をするか」を先に決めるものではなく、子どもを育ちをよく知りその上で可能なものを選び、幼い子どもにはそれなりに、十分に力のある子どもには発揮できる場を与えて、それぞれの力に合ったやり方のできるものを教師が構築していくことと見えよう。

IV まとめ——子どもにとっての新しい音楽リズムのあり方

(1) 音楽リズムは今日子どもの扱えるテープレコーダー（パンプキン）の開発により状況は大きく変わった。歌、

楽器、踊り、音楽の鑑賞などもかつては機械の管理上又はピアノ等の技術上のことから、教師主導型の活動から、子どもが自由に曲を選んどうたり、踊ったり、楽器を鳴らしたりしてのしむことができるようになった。このことによって一方的に教える音楽リズムから、自らのしむ音楽としてさまざまな遊びの中に同化し、音楽リズムそのものが生活化されたと言えよう。一方歌

や踊りでどんな曲を選ぶか、踊りの振りのしかたを提案するかは教師の責任であり、幅広い研修が必要である。

(2) わらべうたは振り、言葉(となえ文句)、ゲームなどが一体となった教材で、どんな子どもでも参加できる点、社会性の成長の上でも極めて有効な遊びである。日本のわらべうた、外国のものを問わず、多くの遊びをおぼえて子どもにたくさん経験させたいものである。

(3) 運動会の野外劇から子どもにとって動くということ、どんなにか基本的な自然であるかがわかった。踊ることとはもとより、鑑賞もうたうことも、楽器を鳴らすことも極めて心地よくなったのしんでおこなうことができる。

(4) オペレッタ等の生活発表会での活動は、それまでの子どもの内面の育ち(意欲、やる気、自制心、課題意識、クラスの仲間意識、他人のまちがいや失敗を許せる気持ち、教師と子どもの信頼関係など)が非常に大切なことがわかった。これらのベースの上に立って子どもが興味を持ってさまざまな力を発揮できるテーマを選ぶことである。

どんな活動にあっても子どもは常に全体として存在し、部分だけの指導ということはありえない。我々教師は多くの教材研究を自分自身豊かな音楽経験を持つと共に、子どもの内面の成長を注意深くサポートしていかなければならない。

— 終 —

(つくば市立桜南幼稚園)

※ この論文は、昭和62年の研究論文として発表されましたものを、連載いたしました。

編集部

私の出会った人々(五)

安島 智子

〈はじめに〉

登校拒否の問題は、社会や学校、あるいは家族や個人の生育歴といった様々の視点から取り組まれている。特に最近は家族療法のような家族力動をシステムティックに操作することによって問題の解消を計る方法も効果をあげているようである。私もその時々でより適切と思われる方法を駆使して取り組んで来たが、実際には様々な考えを総合的に捉えつつ、各々の立場で、その方法を主として活用し、学校や家庭との連携をとっていくという事であろう。確かに学校や家庭における事柄が個人を苦ししい状況に追い込んでいることは私も痛感する所であ



り、その面からのアプローチの重要性を感じている。しかしまた一方では、個人の内的世界にその人の創造性(生成性)が十分に現れ出るような変容を遂げたとき、その個人は現実の場面においてもその人らしい社会参加が可能となるということもしばしば体験されることである。さらに子供に起きた出来事であっても、母親の傷が癒されたり、こだわりが楽になり、母親本来の生命(生成性)が流れ始めるような変化が起きると、子供の状態も共時的に変化し、ひいては家族力動の変化をもたらす事も経験される。

限られた紙数でどこまで書けるか自信はないが、今回は一人の母親の夢を巡って、この問題を考えたいと思う。

〈お子さんの登校拒否をきっかけに来談された千草(仮名)さんの夢を巡って〉

千草さんの家族は、大手企業に勤務するご主人(45歳)、千草さん(42歳)、長女(16歳)、長男悟(仮名)

君(12歳)の四大家族である。東京の郊外に家を建てて住まい、一見いかにも幸せそうなご家族である。

千草さんも悟君が生まれるまで短大の教師をされ、一時家庭に入ったが悟君が2歳半の時復帰した。しかし悟君の初めの登校拒否を機に退職し、現在は週に一、二度、老人家庭のヘルパーをされている。まじめな、しっかりした物腰の方で、担任の先生は「こんな良いご家庭で、良いお母さんなのにどうしてでしょうね」と言われたそうだ。こう語る千草さんの表情にも「どうしてなのか」という気持ちが隠せない。しかし千草さんの生き方にはどこか無理があるのかもしれない。

千草さんの長男悟君は、小5の2月より登校しなくなり、おう吐、腹痛、発熱、鼻血といった身体症状があった。また母親を殴る蹴るといった暴力もひどく、来談前頃(小6、6月)は母親の首にコードを巻き付け、「殺してやる」と首を力いっぱい締めつけるなどの行為もあり、千草さんもひどく苦しい状態で来談された。

初回到千草さんは、悟君について「友達との付き合いもないし、このまま自己解体してしまうのではないかと訴え、千草さんの不安が相当のものであることが推測された。また「保育園ではおとなしく、先生には『良い子』と言われていたが、家では玩具箱をひっくり返して部屋じゅう散らかしたり、襪を破いたり無意識的には私にたいして不満があったのでしよう」と語られた。しかし、2歳半まで育児日記をつけられたと言うことから、千草さんは一生懸命悟君をお育てになったものと思われる。それにもかかわらず、悟君は不満であったとすれば、どのような事が悟君をそのような気持ちにさせるのであろうか。

悟君はまた、小3の時にも10カ月登校しなかった事があり、本児の不登校は今回が二回目である。そのため本人は過去に教育相談室や、病院を幾つか経験しているが、それが嫌な体験として残っているとのことで、今回は一切の治療機関への来談を拒否した。母親だけの来談となった事もあり、この面接では千草さんの見た夢も取

り混ぜて話し合っ行って行くことを考えた。初回到その旨提案したところ、すぐに夢が報告された。

—兎とのかかわりの始まり—

初回 夢1 誰にもなつかない兎が穴から出てこないのを見て、「そのうち慣れるわよ」と言っている。他の人が行ってもだめだったが、私が行くとなつて遊んだ。

この兎は悟君とも千草さん自身とも受け取れる。兎からイメージされる二人のふわっとしたやわらかな生命が穴に隠れなくとも守られる時が来ることが予期され、それはとりも直さず千草さんが内なるご自身との関わりを持ち始めた事によるものであろうか。

悟君はかつて学校に行けずに病院に行った時、「今まで一番楽しかった事は？」と尋ねられ、「何もない」と答えたという。家では、時刻表や、地図、国旗の絵図をたんねんに見て過ごしている事が多く、絵は電車の絵

ばかり描いているということであった。

この悟君の遊びについて語るのは別の機会に譲ることにするが、千草さんにしても、「主婦はつまらない。」「何もしたくなくて店屋物をとることもある」と話され、何かこの姿には空虚感を感じる。何に捕らわれることよってエネルギーが使われてしまっているのであらうか。一方、老人のお世話には生きがいを感じておられ、千草さんの中には老人に向かわせる何かがあるのであらう。また「老人は寂しいと思う」と語った千草さんの孤独も感じられたのであった。

—イニシエーション—

七回目にも夢が報告された。

夢2 通りがかつたら、知り合いの主婦二人が花嫁姿になっていた。和装の白無垢を着ていたが、お色直しで白いワンピースになり、私は「すてきね、すてきね」と言っている。一人は嬉しそうで、一人は嬉しそうでない。社社のような所だった。

イニシエーションの夢として受け取れる。内的な意味で娘としての千草さんの死と妻として、母としての再生が起ころうとしているのではなからうか。嬉しそうな花嫁とそうでない花嫁が登場し、結婚の両面を知りつつそれを受け入れていくということかもしれない。内的な意味では千草さんはまだ実家の娘であったであらう。人生において決定的な段階を迎えるとき、その人のイニシエーションが必要になって来る事がある。まさにその時を迎えていたのであらうか。

— 太母の現れ —

夢3 一びきのまむしがトグロを巻いていた。「あつまむしがいる」と思ったら、場面が変わってまむしが変身して蛇になり、ボンボン飛びかかって来る。「欽ちゃん(萩本欽一) 助けてー」と叫んだ。すると蛇は毒蜘蛛に変わっていた。周りの人は笑っている。じゃれているというか、そうだったのだらう。

このまむしは母なるものもう一面であろうか。力強い生命力ではあるが、また巻き込み飲み込む力をも持つそのすさまじい力を前に「あっ」と息を飲み、たじろいだのかもしれない。さらにまむしは蛇にも、毒蜘蛛にも変身して攻撃してくる。この恐怖ゆえに、この夢を喜劇にすることで千草さんのバランスを保ったのかもしれない。

この夢を報告して、千草さんは小さい頃、蜘蛛と蠍あわさった顔をした銭形の斑点のある蛇の夢を見た事を思い出した。

千草さんは子供のころから無意識にこうした自分を脅かす太母の力に巻き込まれて来たのかもしれない。またこの内的な母なるものは千草さんにとって、夢1の兎に象徴される柔らかで、フワッとした暖かさで心地よさを持つ母なるものとも存在を一にするのであろう。二つの夢はこの両面を意識の光のもとに引き出すことができただけではなからうか。

—母の死—

八回 夢4 私の母が死んだ時の夢だった。母は何を持っていったのかしらと思ひ、母のハンドバックを開けてみると中に、私が母に送った手紙が入っていた。

この後母親が死んだ時が話された。母親は悟母が生まれた時のお産扱いに上京し、しばらくいっしょに暮らして兄夫婦のもとに帰ったが、その後身体具合が悪くなり、気管切開の手術を行った。千草さんが反対したにもかかわらず、兄夫婦は母親の手術を断行してしまい、手術後亡くなるまでの病院生活は上半身に機械をつけ続けるといふ、苦しく、悲惨な日々であった。これらの一連の出来事で千草さんはひどく傷つけられたに違いない。この傷が癒されることのないままにきたのではなからうか。

さらにまた、日頃から何かと母親に対してひどい仕打ちをしていた兄嫁に対し、兄嫁が母の手術に積極的だっ

たことや、その後も看病をしなかったことなど、兄嫁に
対する強い怒りも表した。さらに母親の手術を知らされ
て、1歳半の悟君を置いてかけつけたことや、その夜悟
君が泣き続けたというので、その後は連れて看病に通っ
たことなどが話された。

千草さんがしまいこんできた諸々の思いをここで初め
て表すことができたのであろう。ハンドバックの手紙に
はこの思いが書かれていたのかも知れない。また悟君
は、再接近期における1歳半危機の時期に心理的には見
捨てられる体験がされていたり、おばあちゃんの事で夢
中になっている状態の母親に世話をされていたらしい。
この頃本人が「僕なんか生まなきやよかつたのに」と
言ったり、小さい時のことをよく尋ねるといふことだっ
たが、千草さんの心の動きとどこか対応しながら悟君の
様子も変化しているように思われる。

―自己への旅―

九回 夢5 私人脈やかな通りにいる。インドの街

のようだ。仏教の会館があつてそこで白装束の人たちが
ずらつと並んでお経をあげている。「どうしてお経をあ
げているの？」と尋ねると「平和のため」と言うが表情
がない。私が目指す所は高い塔だった。白いスニーカー
を手に持って裸足で歩いていった。川沿いに降りて行く
と、学校時代の舎監の先生に会った。「上がって行きな
さい」と言われ、川の水で足を洗い、持っていた汚い洗
濯物で足を拭いた。スニーカーを履こうとするが入らな
い。

精神的な旅の夢ではなからうか。自分を納得させる高
みを求めて、素足で大地を踏みしめている。思春期の少
女の自己確立への歩みが連想された。舎監の先生との出
会いは、内なる少女に起きた出来事を物語っているのだ
はなからうか。どんなにお経を唱えても、生きた表情が
ないのは自分が目指すところと違うという、少女の初々
しさが感じられる。川の水で足を洗ったことも一つの儀
式だったのかも知れない。靴がはいらなくなった。少女

の足は幾周りか大きくなったようだ。

千草さんは、宗教家であった亡き姑に母親がずいぶん痛められていたのが子供心に悲しかったこと、またその祖母は世間の人には人助けに熱心な立派な人と言われていたことなどを話した事があった。母親の悲しさを自らの悲しさとしながらも、祖母の偉大さに引かれる気持ちと、宗教をしているのにどうして家の中ではこんなに冷たいのだろうかという気持ちが無難に入り交じったまま来ているということであった。自らの宗教性を求めることを確かにすることで祖母からも一つ自由になれるのではなからうか。

―死と再生―

十四回 夢6 山の頂上に二本木があった。一本は桜の花が咲いている。登るのが大変であったが、悟と夫が一生懸命花をとってくれる。花の咲いていない方の木の根に犬のベルが入り込もうとする。その木は穴が開いて

いるので通り抜けできる。でもその木の下には子供が殺されて埋められたということを近所の人から聞く。

二本の木は、生と死の相対立する状態が、同じ山の同じ土の中からもたらされるということを語っているのであらうか。そしてこの山は相対立するものを同時に許容する女性性・母性性とも捉えられようか。犬によって導かれた木の根の下の、穴の世界は死んだ子どもが還る死の世界でもあり、また桜の花に象徴される命を蘇らせる豊穣の世界でもありと考えられないであろうか。死を受け入れ、かつ再生をもたらずという両極の性質を持つ土の力が千草さんの内にも培われてきたのかもしれない。

千草さんはまた、この夢について「桜の花がお菓子のようにおいしかった。人が埋められたということもあるけれど、桜の花を食べたことできれいになった。」と話された。

これは、悟君の命を殺してきたのは自分なのではないかと苦しんでおられた千草さんが、この桜の花を食べる

ことよって許され、自らも新たな命を与えられるという
ことなのかもしれない。その桜の花を得るのに悟君と
ご主人に助けられたということも意味深い。

―魂を得る―

十六回 夢7 田舎の海に釣りに行く。鱈とかあいな
めとか大きな魚がたくさんいてすぐに釣れそうである。

悟に「鱈の大きいのがいるからすぐ釣れるよ」と言う
と、「あいなめでなければ釣らない」と言う。大きな形
の良いきれいなのがスイスイ泳いでいる姿が見える。確
かに釣りたいものだと思つた。

魚はキリストを象徴するものとして絵画や彫刻にも見
られるが、ここでは悟君の魂の象徴とも考えられよう
か。母親が悟君の釣りたい魚の姿に納得していることも
大事な点であろう。事実、悟君はあいなめの姿が好き
で、現実にもこの頃、良くつき合ってくれるようになって
た父親と、海に行つてあいなめを釣つてきたということ

であつた。

―新しい家・癒された母・義姉との和解―

十七回 夢8 新しい家に移転する。たくさんの人が
手伝いに来てくれている。新居は大変大きく広い庭があ
り、門や屋根つきを立派である。前の方は塀もなく広々
として道路が見える。母も手伝いに来てくれたが母
の部屋もきれいな和室で「疲れたらうから休んだら」と
私と姉が言っている。

たくさんの人が千草さんを助けている。もう孤独な感
じは受けない。新しい家は外の道路とも良い関係を作れ
るのではなからうか。千草さんにとって最も辛かったか
もしれない母親の姿は癒された姿で千草さんの心の内で
生きている。悟君にも「おばあちゃん、あの世で楽に
なつたらしい」と話したそうだ。

夢9 実家に帰ると義姉が母が好きだからと言つてい

ろいろなご馳走を作っている。今まで冷凍していた物まで解凍している。忙しそうなので手伝う。そして庭に出て、果物をとったり、きれいな花をとったりしている。

義姉との和解は何よりも千草さんを豊かにしてくれたであろう。

—水仙の花—

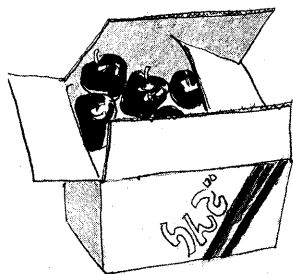
十八回 夢10 田舎の風景。庭の南天の木のところまで一生懸命お経をあげている白装束の人がいる。祖母から父母も揃っている。白装束の人は私にこの宗教に入り、お経をあげると子供が学校に行くようになると話す。私は子供は学校に行っていると言う。そして南天の下で、ここで水仙の花をとっている。

祖母の支配する家や親から本当に自由になったらしい。

この時のご自身らしさは庭の南天の木の下の、水仙の花に象徴された姿ではなからうか。

千草さんの家庭も父親の存在が大きくなった。悟君は一年以上行かなかった小学校の卒業式に父親の強い態度に決心をして、両親とともに出席した。悟君にとっては真にイニシエーションとなった事であろう。中学は本人の希望で夜間に行くことにした。学校恐怖症は自立へのあがきと考える、と河合隼雄が言ったことがあるが、同時に親の自立への叫びでもあるのかもしれない。当然千草さんは私からも飛び立たれた。新しい仕事にも向かわれるということであった。

(このはな児童学研究所)



幼児の教育 第八十八卷 (平成元年) 総目録

☆一号

- フロイトの家を訪ねる 津守 真
 子どもと(10) 新年の祈り 清水 光子
 自由保育の原点を求めて
 幼稚園とは何だろう 小川 剛
 変わることを変わらぬこと M・H
 保育の原点を探る 倉橋惣三「保育法」
 講義ノートより 土屋 とく
 臨床の現場から子育てを考える その6
 子どもの問題行動 鮎田 典子
 若いお母さんたちへ
 アメリカ育児事情 前田 留美

☆二号

- フロイトの家を訪ね、保育のことを考
 える 津守 真
 保育の原点を探る 倉橋惣三「保育法」
 講義録(二) 土屋とく編
 子どもと(11) 冬と春のはざまに 清水光子
 「思いかた」の練習 豊田 一秀
 本の紹介「ことばの前のことば」
 森下みさ子
 幼児の社会性に関する一考察(2)「遊び
 に加わる」ことについて 上垣内伸子
 南の島の子どもたち(6)
 ユタ的なこと 浅野恵美子
 若いお母さんたちへ
 アトランタ便り 入江 礼子

☆三号

- 〈巻頭言〉「思いの記」―要領をめぐ
 って 日名子太郎
 ヤヌシュ・コルチャック 津守 真
 保育の原点を探る 倉橋惣三「保育法」
 講義録(三) 土屋とく編
 子どもと(12) はる、そして巣立ち
 Aちゃんのこと 清水 光子
 イギリス便り 立教英国学院の子どもた
 ち その2 小野 英子
 自然保育 柳瀬 恒男
 若いお母さんたちへ
 日常の中から 大沢 啓子

☆四号

〈巻頭言〉

国際化時代の幼児教育 莊司 雅子
容器から水をうつすこと 津守 真

保育の原点を探る 倉橋惣三「保育法」

講義録(四) 土屋とく編

子どもと過ごしてー共に学び歩む

田山 治子

幼小連絡と生活科 長坂 利厚

臨床の現場から

私の出会った人々(一) 安島 智子

保育の難しさ 一三三年目の驚き、

F・M

若いお母さんたちへ 子どもと共に参加

する保育 村尾美保子

☆五号

〈巻頭言〉 子どもとともに 藤野 敬子

保育の実践の中で「発達」を考える

津守 真

保育の原点を探る 倉橋惣三「保育法」

講義録(五) 土屋とく編

〈特集〉土

大地にふれる 真壁 伍郎

土いじり 有田菊もみ修業に思う

今井田道子

「土」 私の日曜農業 近藤千恵子

「土の匂い」を 飯島 俊勝

土 生き物としての土 清水 永一

堅い土、柔らかい土 豊田 一秀

「土」 野菜を育ててきて 石黒逸子

子どもにとって楽しい音楽リズムのあり

方を考える(1) 原口 純子

イメージ画にみる母子関係 その1

ささえる母ともたれる私やまだようこ

若いお母さんたちへ

初めての道具との出会い 小園江幸子

☆六号

〈巻頭言〉

体験を通じた活動を 秋山 和夫

子どもの思いを追って 津守 真

倉橋先生から学んだこと

安村 ふさ・沼館 正尾・柴田みどり

川崎 千束・清水 光子・八坂 富子

秋山ちえ子・鈴木 貞子・堀合 文子

相馬 誠子・野辺 繁子・菊地 明子

ごっこ遊びっておもしろい 田村 玲子

リズム遊び

戸倉ハルの作品を通して 吉成 啓子

臨床の現場から

私の出会った人々(二) 安島 智子

ことばを生きる体験(二)

乳児との語りあい 浜口 順子

☆七号

〈巻頭言〉世界に恥じない日本の幼稚園

夜昼寝起きしているうちに 津守 真

〈特集〉食

栄養と食文化

食品の微生物汚染 諸角 聖

「食べる」楽しみ・喜びを子ども達に

上坂元絵里

昆虫と食物

小島 賢司

家庭科からみた「食」

橋本 都

保育の原点としての「共在」

嶺村法子

イメージ画にみる母子関係

その2

いく母とおいかける私 やまだようこ

昔話の一考察 女性の心の内的成長につ

いて 小野 瑞江

子どもにとって楽しい音楽リズムのあり

方を考える(2) 原口 純子

若いお母さんたちへ 宮里 暁美

気分を変えろということ

☆八号

公正を求める子ども 津守 真

〈特集〉緑陰図書紹介

子供の夕暮 三木 紀人

先生と生徒の人間関係 飯長喜一郎

1988/89 日本子ども資料年鑑他 村石京

人生の親戚 中村 弓子

わたしのあさ 他 関 祐二

大都会の小さな家―住の思想へ―

皆川美恵子

臨床の現場から

私の出会った人々(三)

安島 智子

子どもの絵あれこれ(上)

川崎 千束

ことばを生きる体験(二)

意味の豊かさを求めて

浜口 順子

子どもにとって楽しい音楽リズムのあり

方を考える(3)

原口 純子

若いお母さんたちへ

自立―かかわりの中で

野島 順子

☆九号

〈巻頭言〉early-childhood education

のいとなみ

しゃぼん玉をめぐる対話

高橋さやか

保育の原点を考える

津守 真

子どもは自力で乗り越えるもの

柴崎 正行

本の紹介「保育の一日とその周辺」

田中三保子

昆虫 小さな世界

友定 啓子

子どもの絵あれこれ(下)

川崎 千束

昔話の一考察 女性の心の内的成長につ

いて(下)

イメージ画にみる母子関係

その3

おとす母とうたれる私 やまだようこ

若いお母さんたちへ

小野 瑞江

劇「おしやべりなたまごやき」と四度

目の「ありんこ市」

友定 啓子

☆十号

〈巻頭言〉

保育における指導について

林信二郎

状況を表現として理解すること

津守真

倉橋惣三「保育法」講義録を現象学的視

点から読む

保育者の働きかけと子どもの変容

保原 良彦

にとって「指導」は必要か

東喜代雄

理解しにくい子どもたち

T夫のこと

臨床の現場から

F・M

私の出会った人々(四)

安島 智子

「お店やごっこ」実践の史的考察

昭和前期の「生活」への着眼による実

践を中心にして

師岡 章

子どもにとって楽しい音楽リズムのあり方を考える(4) 原口 純子
若いお母さんたちへ 川上 美子
一枚の写真

☆十一号

時の流れの中で 足立寿美「カウント・ゼロー原爆投下前夜」をよむ 津守真
〈特集〉おもちゃ
日本のおもちゃを考える 多田 信作
保育環境としての玩具を考える 村石 京

〈ままごと道具〉考 インドネシアの場合 渡邊美津子
私の手作りおもちゃ教室 黒須 和清
動詞で作ろう手作りおもちゃ 秋田輝喜
コンピュータゲーム 大川 潭二
人格形成を促進する玩具の機能的特性 三神 静子
一人ひとりのイメージの世界を表現するモノとしてのおもちゃ 今井 和子
イメージ画にみる母子関係 その4

そそぐ母とあおぐ私 やまだようこ
若いお母さんたちへ 河合 聡子
赤ちゃんをむかえる日々

☆十二号

時の流れの中で(2) 津守 真
逆転する変化を見て 黒田 成子
子どもとクリスマス 倉橋惣三の保育目標論
心理学から保育学へ 児玉 衣子
海外クリスマス便り フランスのクリスマス 雨宮 裕子
アトラクタのクリスマス 入江 礼子
西ドイツのクリスマス 美谷島いく子
子どもにとって楽しい音楽リズムのあり方を考える(5) 原口 純子
臨床の現場から 私の出会った人々(五) 安島 智子
第八十八巻総目録

幼児の教育 第八十八巻 第十二号

十二月号 ◎

定価 四一〇円(本体三九八円)

平成元年十一月二十五日

印刷

平成元年十二月一日

発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子

発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

TEL・〇三一二九二一七七八一

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします



幼児の生活と教育

改訂版

集団生活の中で子どもの認識はどのように深まってゆくか。最近の幼児を取り巻く環境の変化と、音楽リズム、劇遊び等表現にかかわる実践を加え、全面改訂。

海 卓子・著

A5判・354頁・定価1,650円(本体1,602円)

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

フレール館

あせらないで待つ保育、つまずかせて学ばせる体験保育、子どもと保育者との一対一の保育、遊びの大切さを保育の信条とした本吉圓子保育の長年の実践を年齢別三分冊にまとめた保育関係者の必読書！

保育が変ると子どもが変る!!
本吉圓子〃生き生き、保育〃の真髄

子どもの遊びと指導のポイント① 0歳児の保育

第1章は、月別に実践例をとりあげ、それぞれの月の保育のポイントを付記して、指導の流れがつかめるようになっています。第2章は、4月に同時に入園してきた3か月齢児と9か月齢児の事例を並記して、その発達段階の差による保育内容のちがいを明らかにしています。

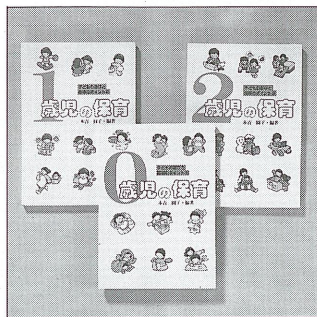
子どもの遊びと指導のポイント② 1歳児の保育

1歳児は、一生の中で両親を最も必要とする時期です。集団生活を求めない1歳児に対して、子どもの心を大切にしている保育の実践例をまとめました。1章・2章には月別の子どもの遊びの変化をとりあげ、指導のポイントを付記しました。子どもの発達を正しく理解することができ、探索活動を生かした指導計画作成に役立ちます。

子どもの遊びと指導のポイント③ 2歳児の保育

第1章は、子どもの姿と指導のポイントを並記して、子どもの生活がよくわかり、指導の手がかりがつかめるようになっています。2章では、年間指導計画や月案例などを紹介し、子どもが遊び込める計画指導づくりに役立ちます。3章は、子どもの遊び方の図解、4章は、たくさんの実践例を紹介しています。

遊びを育てる 指導計画作成資料集



1. 月別子どもの姿の実例に指導のポイントが付記されていて0～2歳児の発達段階がわかり保育のめやすがつけやすい。
2. 子どもの生活を中心にした年間指導計画案は、保育計画の見直しに役立つ。
3. 子どもが喜ぶ遊びの実例が豊富で活動を発展させるのに役立つ。

実践に役立つ
三大特長

本吉圓子 編著

0歳児の保育(228頁)・1歳児の保育(228頁)・2歳児の保育(232頁)

B5判・各定価2,060円(本体各2,000円)・セット定価6,180円(本体6,000円)